〈研究ノート〉

黒髪の変遷史への覚書き

平松隆円

髪とはなにか

ケラチンという硬質たんぱく質で形成され、外側をキューティクルが覆っている。一本で約一〇〇グラムのものをつるすことができる。

水分をよく吸収し、長軸の方向に一～四パーセント、横軸の方向に一四パーセント伸びる。その性質を利用して、公共的な気象観測に用いられる湿度計の材料にもなる。

そう、髪だ。しかし、髪とは一体何なのだろうか。

頭部にはえる毛。頭髪

（『広辞苑』岩波書店、二〇〇八年）

現代の代表的な国語事典である『広辞苑』をみると、髪とは頭に生える毛のことを指している。もちろんこれは、自明のことだ。髪を削ぐ、髪を抜く、髪を結ぶ。このときの髪は、頭の毛を意味している。

結った髪の毛。かみかたち

（『広辞苑』岩波書店、二〇〇八年）

だが、『広辞苑』にはもう一つ、「頭部の毛を結った形」という意味もしるされている。髪は、頭部にはえる毛そのものであると同時に、それを結うことを意味している。

いわゆる「髪形」は、「整えた頭髪の形、ヘアスタイル」を意味するが、髪そのものにも髪形の意味がある。

ほかの辞書では、どうだろう。

頭の義、頭の毛ト云フガ、全キ語ナルベシ、首ノ上ニ生ズル毛

（『大言海』冨山書房、一九三二年）

国語学者の大槻文彦がまとめた国語辞書『言海』を改訂増補した『大言海』には、「頭の義、頭の毛ト云フガ、全キ語ナルベシ、首ノ上ニ生ズル毛」とある。

「頭」の読みを「かみ」として、「カシラ。カウベ。髪の毛ハ、頭の毛ナリ」という意味を与えている。つまり、「髪」とは「頭」と同義と、とらえている。

また、大槻文彦は中国南北朝時代（四三九年～五八九年）、梁の顧野王によって編纂された部首別字典「玉篇」を引用し、「首の上に生える毛」を髪としている。

『広辞苑』は、たいてい『大言海』の説明が、そのまま引き写しになっているといわれる。にもかかわらず、「頭部の毛を結った形」という意味が、『大言海』にはなく『広辞苑』にある。

これは、髪形が比較的新しい意味であることを示している。

上髪の略なり、頭部に生ずる毛なり、かみのけ、毛髪などいふ

（『帝国大辞典』三省堂、一八九六年）

参考までに、国文学者の藤井乙男・草野清民が編纂した、和漢古今の雅言俗語が収録されている『帝国大辞典』をみても、やはり髪形の意味はない。

もっと古い辞書ではどうだろうか。江戸時代の国学者である谷川士清が編纂した『和訓栞』は、古言、雅語、俗語、方言をも含め、出典や用例を示した国語辞書である。これによると、「髪」とは頭に生える毛を意味しており、やはり髪形の意味はない。

平安時代中期に源順によって作られた辞書『和名類聚抄』でも、「首上長毛也」と、頭に生える髪を意味している。

髪の語源を整理すると、大きく分けて「身体の上部にあるところからカミ（頭）（上）を意味する」説と「頭に生える毛からカミノケ（上毛）を意味する」説とになる。

髪はたしかに、頭の毛、そのものを指している。しかし同時に、髪が伸ばし放題で、何も手を加えられていないということはない。そのため髪は、次第に手を加えた頭の毛そのものを意味するようになったに違いない。

それは、文学作品にあらわれる意味をみてもあきらかだ。

ここにその大神の髪を握りて、その室の椽毎に結ひ著け

（『古事記』岩波書店、一九二七年、二五頁）

か黒き髪に　いつの間か　霜の降りけむ

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、二一三頁）

和銅五（七一二）年に、太安万侶によって献上された日本最古の歴史書に、また『万葉集』には歌人山上憶良の歌に、「髪」が

しるされている。これらは、頭に生える毛を意味している。

縫物髪もよく仕おぼえつるよし、父上の消息にてとく聞ぬ

（「昔話稲妻表紙」『新日本古典文学大系』岩波書店、一九九〇年、二三八頁）

上は婦人たちの結髪の風より、下は日本下駄の不便利まで、人のあげつらふ世の中とぞなりける

（『当世書生気質』岩波書店、二〇〇六年、二五一頁）

文化三（一八〇六）年に、山東京伝が著した、近松門左衛門の「傾城反魂香」などの不破伴左衛門と名古屋山三郎の物語をからませ、敵討ちを中心にしたお家騒動物語である『昔話稲妻表紙』では、結った髪の毛、またそれを結うことの意味として用いられている。

これは明治一八（一八八五）年から明治一九（一八八六）年に刊行された坪内逍遙の小説『当世書生気質』などにもみられる。

古い時代の文学作品では頭の毛そのものを意味し、時代が新しくなることで髪を結うことを意味するようになる。

髪は、「かみ」と読む。『古事記』にあった「ここにその大神の髪を握りて」や『万葉集』にあった「か黒き髪に」は、その一例だ。

ほかに、髪を「はつ」や「くし」と読む場合がある。しかし読み方が異なっていたとしても、その意味は変わらない。

Ichifat　イチハツ　（一髪）　一本の髪の毛

（『邦訳　日葡辞書』岩波書店、一九八〇年、三二五頁）

げにや大道は髪のごとしと、毛すじ程もゆるがぬ御代のためしには

（『東海道中膝栗毛：上』岩波書店、一九七三年、七一頁）

慶長八（一六〇三）年、イエズス会の宣教師らが編纂した、古代語から近世語への過渡期たる室町時代の日本語について話し言葉を中心に採録し、語義、用例を示すほか、語法、発音にまで加えた『日葡辞書』や享和二（一八〇二）年から文化一一（一八一四）年にかけて初刷りされた十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』では、髪を「はつ」と読ませている。その意味は、「頭の毛」を意味している。

髪を結げて髻に為す

（『日本書紀：一』岩波書店、一九九四年、六二頁）

こなたにて御ぐしなどまゐる程に

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、一五二頁）

御髪長く美しうて、かいそへて伏せさせ給へり

（『栄花物語：上』岩波書店、一九三一年、七六頁）

『日本書紀』や『枕草子』などでは、接頭語の「み」や「お」をつけて、「おぐし」「みくし」と読ませ、尊敬語の形で用いられている。しかしその意味は、「頭の毛」を意味しており、「かみ」や「はつ」とかわらない。

首を廻して顧眄之間に

（『日本書紀：一』岩波書店、一九九四年、三六頁）

もとより御風おもくおはしますに、医師共の、「大小寒の水を御ぐしにいさせ給へ」と申しければ

（『大鏡』岩波書店、一九六四年、三三頁）

『日本書紀』では首の字をあて、「くし」と読ませている。だが、その意味は髪ではなく頭の意味として用いている。

髪を、「かみ」「はつ」「くし」と、どのように読むかについては、古代よりいずれも存在しており、とくに読み方によって意味の使い分けがされているわけでもない。

『日葡辞書』には、「fat　はつ」という読み方がある一方で、「cami　かみ」もあり、その意味は頭の毛であり同じだ。

髪の結い方、髪形は基本的には放髪、結髪、断髪、剃髪にその形は分けることができるものの、その表現方法は一定ではない。

互いに絡まり合ってロープのような束形状になった髪形のドレッドロックス、髪を大きく膨らませ丸い形にするアフロヘア、頭髪を一部残して剃りあげ、残りの毛髪を伸ばして編んだ男子の髪形である辮髪など。

ドレッドロックスは、一九三〇年代にジャマイカの労働者階級と農民を中心にして発生した宗教的思想運動「ラスタファリアニズム」において生まれた。旧約聖書の記述にのっとり、たとえ髪の毛であっても自らの身体に刃物を当てることを禁じた結果、頭髪が絡まって房状になった髪形だ。宗教的思想が、ドレッドロックスという髪形を生んだ。

アフロヘアは、アメリカのアフリカ系アメリカ人による公民権の獲得運動のなかで生まれた。ブラック・イズ・ビューティフルを合言葉に運動がおこった結果、黒色人種に多い縮毛を際立たせるような髪形として注目された。アフリカ系アメリカ人の社会運動が、アフロヘアを生んだ。

辮髪はもともと、満州族をはじめとする北東アジアの民族のあいだでおこなわれていた。満州族が一六四四年に清朝を樹立すると、被支配者となった漢族に辮髪を強要する。漢族は辮髪に抵抗したが、清朝は辮髪を拒否する者には厳罰をもってのぞんだ。そして、一九一一年に清朝が倒れるまで辮髪は強制され続けた。支配―被支配の象徴として、辮髪は存在した。

多様な髪形が様々な社会や文化に固有して存在する。同時に、

髪の長さの長短や髪形は、日常生活において審美的な関心を集めている。髪への関心の範囲は、日常の手入れから民俗的な儀礼などにみられる行動にまで及んでいる。

切っても再生するという特徴が神秘的に感じられ、儀礼や呪術、信仰のなかで毛髪が果たす象徴的役割は小さくない。また、髪形の変化が社会的地位や状況の差異をあらわす儀礼に利用されることも、珍しくはない。

髪について知ることは、それぞれの文化や社会の変化を描き出すことにもつながる。どのような髪形をするかが、文化や社会の制約のなかで存在しているからだ。しかし同時に、個人の美への志向も、その表現にあらわれている。

髪に関する現象には、髪に対する感情の段階、社会と文化に規定される個人の段階、社会と文化の段階がある。その構造を踏まえながら、髪には人々の身分や生き方が如実に反映されてきたという歴史から、社会の変遷を、また人々のもつ無意識の戦略について論じることで、普遍的な美への志向を読み取ろうと思う。

なお、引用文における漢字や仮名の旧字体については、現在一般に使用されている漢字に適宜改めたことをことわっておく。翻刻されたものについては、基本的に原文通り引用した。

「盛り髪」の登場

ポンパ巻き貝ハーフアップ、くりくりエリ巻きトカゲ、リゾートすだれアレンジ、トルネード花魁アップ。

聞いただけでは、何のことだかわからないだろう。手がかりは、髪。つまり、髪形の名称である。

盛り髪という髪形が、二〇〇五年頃からみられるようになった。基本は、巻き髪だ。外巻き、内巻きなら、昔からあった。

けれども、盛り髪といわれる髪形は、髪を巻く程度ではない。髪をゴムやヘアピン、ヘアスプレーを用いて、結ったり巻き上げたりする。

盛り髪の初出は、雑誌『小悪魔ageha』（インフォレスト社）だ。盛り髪は、巻き髪の一種。だから『小悪魔ageha』も創刊当初は、巻き髪とよんでいた。

二〇〇五年は愛知万博とともに、名古屋嬢が全国的に知られるようになった年。名古屋嬢は、名古屋で暮らすお金持ちのお嬢様の俗称。名古屋城と名古屋のお嬢様を掛けた語呂合わせが語源となっている。

彼女たちの髪形は、毛先に段差をつけたレイヤーによって軽さをだし、大きな緩めのカールをつけるのが特徴で名古屋巻きとよばれていた。

なぜ、名古屋巻きとよばれるのか。

名古屋巻きの特徴は、ナチュラル、ゴージャス、やわらかさで、3つの頭文字をとると『なごや』

（『日経トレンディ』日経BP社、二〇〇四年九月号、八二頁）

もちろん、名古屋の若い女性のあいだで流行したから、名古屋巻きとよばれたと考えられる。しかし、そもそも誰が名古屋巻きをはじめたのか。

名古屋巻きは、うちの美容師、土屋雅之が考え出したんです

（『プレイボーイ』集英社、二〇〇一年六月二六日号、二二五頁）

名古屋巻きは、名古屋市中区の美容室BLANCOビーライトシーンで働いていた土屋雅之が考案したといわれている。

しかしながら、柔らかくゆるやかな内巻きが特徴でしかない髪形が、本当に土屋雅之によるものかは、わからない。

考案者の名前を取って、土屋巻でもよかったのですが。ただ、名古屋全体を盛り上げたかったので、名古屋巻きと名付けたんです

（『プレイボーイ』集英社、二〇〇一年六月二六日号、二二五頁）

また、命名も土屋雅之によるものかは、わからない。名古屋巻きの初出は、雑誌『JJ』（光文社）の二〇〇〇年三月号の特集。そこには、「春休み　彼も恋する「名古屋巻き」」とある。

ゆるやかな内巻きの髪形を、『JJ』が「名古屋巻き」とキャッチコピーとして命名したのが広まったのが、真相だ。

名古屋巻きに先立ち、神戸巻きがあった。神戸巻きの特徴は、強めの外巻き。これに対抗するように、柔らかな内巻きとして名古屋巻きがあらわれた。そのため、神戸に対抗するかたちで名古屋と命名された可能性がある。

名古屋巻きがブームとなって、梅田巻き、京都巻き、銀座巻き、青山巻きなど、日本のあちらこちらで〇〇巻きが生まれた。

たとえば、京都巻きは京都らしい髪形をと、同志社女子大学の学生五人でつくる京都巻き研究会が、内巻きと外巻きを合わせたミックス巻きとして二〇〇六年に発案した。

この名古屋巻きが盛り髪のもとになっている。巻き方が派手になり、技巧的になるにつれて、盛り髪とよばれるようになる。エクステンションをしたり、花飾りをつけたりもする。

盛り髪の盛とは、嵩増しを意味する。若者のあいだでは、話しを大げさにいうことも、話しを盛るという。

自由国民社から刊行されている『現代用語の基礎知識』の編集に関わった亀井肇によると、「東京・渋谷に集まる女子高生たちが、二〇〇五年の三月ごろから使い始めたことば」だという。当初は、化粧が濃い（＝過剰である）ことを盛ると表現していたが、しだいにアクセサリーや髪形にも使われ出した。

名古屋巻きが広まる時期に、盛るという言葉も使われ出した。二〇〇五年に、黒肌系ギャル雑誌『nuts』の増刊ムックとして登場した『小悪魔ageha』は創刊される。

『小悪魔ageha』は、今よりもっとかわいくなりたい美人GALのための魔性&欲望BOOKというキャッチコピーのもと、

キャバクラなど夜職でキャストとして働く女の子たちを、その読者層としていた。

しかし、二〇〇九年の時点での販売部数は、公称三〇万部。これは、集英社の『non・no』の二五万部よりも多い。

これは、夜職だけではなく、普通の二〇代前半の女性が購入していることを意味している。そんな彼女達は「ａｇｅ嬢」とよばれ、夜職の女の子たちのメイクやファッションを真似ている。

夜の女の子たちは、ちょっとでも派手な髪型にしたり、きれいなドレスを着たりするくらいしか楽しみが無いんですよ。だからせめて出勤前に髪型やドレスを決めるのに参考になるものを作りたいなと思っていたんです

（「小悪魔ａｇｅｈａ」編集長にインタビュー、http://gigazine.net/news/20090714_koakuma_ageha/、二〇〇九年七月一四日）

女性らしさやゴージャスさを強調するデザインの巻き髪が、夜の世界で働く女の子たちに受け入れられる。そして彼女たちは、もっとかわいくなりたいと、髪を盛る。

しかしこれは、今にはじまったことではない。

昔は、人生の節目に髪を削いだ

そもそも、髪を結う結髪は、家事や労働など、働くときに邪魔な髪の毛を束ねておくことであり、自然におこなわれていた。

しかしながら、歴史的に女性は、髪をできるだけ長く、そして結ばないでいた。髪を結うことが美しいとは考えられていなかったからだ。

日本人にとって髪は、人生と大きく関わるものだった。髪を削ぐことも、たんに伸びたから削ぐというものではなく、人生の節目と関係していた。

今日ぞ初めて削いたてまつらせたまふ。ことさらに行幸の後とて

（『紫式部日記：上』講談社、二〇〇二年、一七五頁）

『紫式部日記』は、寛弘五（一〇〇八）年一〇月一七日の出来事として、藤原道長の初孫である敦成の産剃りを記録している。

産剃りは生まれて七日目におこなわれた。これは、産剃りが、出産の血による穢れを取り去ると考えられていたからだ。

「ことさらに行幸の後とて」とは、親王の生まれたままの姿を帝にみせようとする計らいであったと、考えられる。つまり、産剃りはとても重要な儀式であったことを意味している。

その後、おおむね三歳を迎えるまでは、男女とも髪を剃った頭で過ごした。その理由は、高温多湿の日本の気候では新陳代謝の活発な幼児の頭皮は不衛生な状態になりやすいため、湿疹やかぶれなどを予防するためだった。

かしらは、露草して、ことさらに色どりたらむ心地

（『源氏物語：四』岩波書店、一九六六年、一六五―一六六頁）

『源氏物語』には二歳の薫の描写に髪の剃り跡が青々としている状態が描かれている。三歳になったくらいから、髪を剃ることをやめて伸ばしはじめる。これを髪置とよぶ。

そして、男性は五歳になり、女性は四歳になると、今度はある程度伸びた髪を切り揃える髪削ぎをおこなった。髪削ぎは、髪置の儀式が終わり、生えそろった髪先を肩のあたりで切りそろえて成長を祝う儀式である。

この春より生ほす御髪、尼そぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく

（『源氏物語：二』岩波書店、一九六六年、二二六頁）

光源氏と明石の御方とのあいだに生まれた一人娘である明石の姫君も、三歳となり髪を伸ばしはじめる。尼そぎとは、肩のあたりで切りそろえた髪形を意味する。受戒して尼となった女性も肩の辺りで髪を切りそろえた。

頭はあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、二〇六頁）

前髪が目の上にさすようにおおう姿を、めざしとよんだ。清少納言は『枕草子』のなかで「うつくしきもの」として、尼そぎで額の前髪が目の上におおう、めざし姿をあげている。

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな　沖にをれ波

（『古今和歌集』岩波書店、一九八一年、二五五頁）

最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の東歌では、このめざしを転じて幼童そのものをさす言葉として用いられている。

三歳になったときに、袴着の儀をおこなうために、髪を伸ばす。

四つの年の霜月は髪置き、はかま着の春も過ぎて、疱瘡の神祈れば跡なく、六つの年へて

（「好色一代男」『近代日本文学大系』国民図書、一九二七年、五頁）

袴着の儀とは、男児、女児ともに、三歳、五歳、七歳時におこなわれた祝いの儀式だ。鎌倉時代になると、髪置とよばれるようになる。

髪削ぎの儀式化がすすむのは平安後期からだといわれている。概略をまとめると次のようになる。

まず、髪を削ぐ人が手を洗う角盥と削いだ髪を入れる受け箱、

髪を削がれる人が乗る碁盤を用意する。角盥のなかには、吉方の水を入れ、そのなかに吉方の石と山菅、山橘などを入れる。

石には長い年月を経ても変わらない強硬な性質に、山菅にはその繁殖力に、山橘には寒さや霜に負けないように、それぞれあやかって長寿と健康、そして髪が豊かに育つ願いが込められている。

受け箱は手箱の蓋を用い、内側に檀紙を敷き、櫛一枚を入れておく。吉時に儀式を開始し、髪を削がれる人が吉方を向いて碁盤の上に立ち、髪を削ぐ人が介添役から道具を受け取って髪を切り揃える。

のちに、初めて髪を削ぐことを特に深削ぎと称し、年齢も五歳に固定されるようになっていく。これが、武家社会で同じく五歳の通過儀礼となった袴着と混交して、七五三の「五」の部分になる。

髪置（国際日本文化研究センター　外像データベース）

髪を削ぐ役は、一族の尊者が鬢親として務めた。長暦元（一〇三七）年に、後一条天皇皇女の章子、馨子両内親王が髪削ぎをしたときは、母方の伯父であり氏長者である藤原頼通が髪を削いでいる。

髪を削ぐことが、通過儀礼としての意味をもっていた。そして、年に何回か吉日を選んで削ぎ整えながら、髪を伸ばしていった。

振分髪の、何心なき直衣姿

（『源氏物語：三』岩波書店、一九六五年、二九〇頁）

髪が肩ぐらいまで伸びる。振分髪は髫ともいい、髪を肩の辺りまでの長さに削ぎ揃え、頭上中央で左右に分けて垂らした。

みづら結ひ給へる面つき、顔のにほひ、さまかへ給はんこと、惜しげなり

（『源氏物語：一』岩波書店、一九六五年、三四頁）

『源氏物語』には元服前の少年の髪形として、振分髪だけではなく「みづら」が登場する。みづらは、角髪もしくは美豆良とも

書かれ、鎌倉時代になると鬢頬ともよばれる。

この髪形は、徳川時代まで公家の少年の髪形として受け継がれた。髪全体を中央で二つに分け、耳の横でそれぞれ括って垂らした。それが角のようにみえることから、角髪と書かれるようになったと古事記伝にはしるされている。

元服するときは、男性は長い髪で髷を結い、冠を被る儀式をおこなった。また女性も、髪上または初笄とよばれる、下ろしたままの髪を束ねて髷に結う儀式をおこなった。

びんをそぐも。十六からなり。そぎはじむるは。おとこそぐなり

（「大上臈御名之事」『群書類従』続群書類従完成会、一九六〇年、一七頁）

女房の服飾や幼名のほか、百余りの女房詞をしるしている『大上臈御名之事』によると、耳周りの髪である鬢を削ぐのは一六歳だった。そしてそれは、夫となる男の手によっておこなわれた。

橘の光れる長屋にわが卒寝し童女放髪に髪上げつらむか

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、一七五頁）

童女放髪の「うない」とは、髪をうなじのあたりで垂らしていることであり、「はなり」は、髪を結わずお下げにしていることである。どちらも、結い上げていない髪形やその童女を意味している。

『万葉集』には、橘の実の照り映える長屋へ連れて寝たあの放髪の子は、今頃髪上げをした立派な女性になっていることだろうという意味の歌が残っている。

この歌は、女性の黒髪は貞操と深い関係があったことを教えてくれる。

よき程なる人に成ぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す

（『竹取物語』岩波書店、一九七〇年、一〇頁）

童女は放髪とよばれる下ろしたままの髪であり、一人前の女性となるとき、夫となる男性に髪を結い上げさせた。

振分の髪を短み青草を髪にたくらむ妹をしぞおもふ

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、二〇頁）

もし髪上げに十分なほど髪が伸びていなければ、その時は、契りが結べなかった。髪上げが可能な長さになるまで、待たなくてはいけなかった。

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあくべき

（『伊勢物語』岩波書店、一九六四年、二四頁）

平安時代初期に成立した歌物語『伊勢物語』に、髪上げをすべき結婚の時期が近づいたが、夫と定めていたあなた以外の誰のために髪上げをしようか、という歌が収められている。

髪上げは、成人と同時に結婚をも意味した。そのため、恋と髪は密接に関係している。

たけばぬれたかねば長き妹が髪このころ見ぬに掻入れつらむか

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、七七頁）

この歌は題詞によると、三方沙彌が園臣生羽の娘を妻としたもののすぐに病気となったときに作られた。

夫婦の契りを結ぶ際に、園臣生羽の娘の髪を梳ったことを思い出し、自分の恋心をその髪のなかに留めておくために髪を梳ったことを、「髪をみる」と表現している。

人はみな今は長しとたけと言へど君が見し髪乱れたりとも

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、七八頁）

三方沙彌の歌を受け、園臣生羽の娘は梳ることなく、三方沙彌が梳った髪をそのままにしておき、再会を願った。同じような歌は他にもある。

朝寝髪吾はけづらじ愛しき君が手枕触れてしものを

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、二三頁）

髪を梳ると、愛しい男性の魂が抜けてしまう。そのままにしておき、再び男性が来て梳ってくれることを期待している。

置きて行かば妹恋ひむかもしきたへの黒髪しきて長きこの夜を

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、一六八頁）

この歌を詠った田部忌寸櫟子は、太宰府に赴任する。妻を一人おいて行ってしまったのなら、妻は長い夜を寝床に黒髪を敷いて恋い慕うのではないかと詠っている。

ぬばたまの黒髪敷きて長き夜を手枕の上に妹待つらむか

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、二七頁）

同様の歌が、『万葉集』には多くある。また反対に、妻自身がひとり寝の寂しさを詠う歌もある。

せむ術の　たづきを知らに　石がねの凝しき道を　石床の

根延へる門を朝には　出でゐて嘆き　夕には　入りゐて思ひ
白たへの　わが衣手を　折り反し　独し寝れば　ぬばたまの
黒髪敷きて　人の寝る　味眠は寝ずて　大舟の　ゆくらゆく
らに　思ひつつ　わが寝る夜らを　数みもあへむかも

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、九一頁）

黒髪を敷いて寝ることは、恋人が夢にあらわれ、夢のなかで会うことができるようにと、祈願としておこなわれた。

髪が成人儀礼として、またそれが男女の契りとして密接に結びついていたからこそ、髪を敷いて寝るという行動としてあらわれた。

平安時代、長い黒髪は美人の条件

歴史的な女性の髪形といえば、まず平安時代の長い髪を思い浮かべる。

なべてのさまにはあるまじかりつる、人のうち垂れ髪の見えつるは

（『源氏物語：六』岩波書店、一九六七年、二五三頁）

平安時代、女性は打垂髪もしくは垂髪という、長い髪が美人の条件とされていた。清少納言も『枕草子』のなかで、髪の長い人を「うらやましげなるもの」としてあげている。

では、どれほど長かったのだろうか。

御髪のいと長げなりしをかい超して見たまへりしかば、いとうるはしく多くて、七尺ばかりにぞありし

（「うつほ物語：三」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇二年、一六五頁）

平安時代中期に成立した『うつほ物語』では、髪が艶やかでふさふさとあり、その長さは七尺（二一〇㎝）とある。

六尺ばかりなる末つき、扇をひろげたるやうなり

（「夜半の寝覚」『新編日本古典文学全集』小学館、一九九六年、二二〇頁）

また、平安時代後期に成立した王朝物語のひとつである『夜半の寝覚』では、広げた扇のように艶々と隙間なく髪があり、その長さは六尺（一八〇㎝）の長さであったとある。

七八尺ばかりうちやられたる末は、五重の扇を広げたらむやうに、世に知らずめでたう

（「浜松中納言物語」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一年、三〇三頁）

同じく平安時代後期に成立した物語文学の『浜松中納言物語』では、七八尺（二一〇～二四〇㎝）であり、伸びている髪の先は扇を広げたようとある。

おおよそ、文学作品に表現される美しい髪の長さは、六尺以上といえる。髪は、長ければ長いほど、美しいとされていた。

歴史物語である『大鏡』には、藤原氏一門のなかでも、とくに美人とされた藤原芳子について、しるされている。

村上の御時の宣耀殿の女御、かたちおかしげにうつくしうおはしけり。内へまいり給とて、御車にたてまつりたまひければ、わが御身はのり給けれど、御ぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける

（『大鏡』岩波書店、一九六四年、七五頁）

そこでは、本人が牛車のなかにいてもなお、髪の先が住居の柱に巻きついていたほどに、髪は長かったという話が残されている。

もちろん、髪がそれほどまでに長く伸びるとは考えられない。一般的に、髪の成長は一日平均〇・四㎜。一年で約一〇㎝であり、髪の寿命は三年から五年といわれる。伸びても、一〇〇㎝にも満たない。

藤原芳子の髪の長さの真偽はともかく、やはり長い髪が美しいという意識が存在したからこそ、この逸話は生まれた。

しかし、ただ長ければ良いというわけではない。艶やかな黒色の髪であることが、美しいとされていた。

平安文学には、この髪の艶やかな黒を讃える表現が、さまざまにみることができる。

御髪はゆらゆらと、翡翠とはこれをいふにやと見えて

（「夜半の寝覚」『新編日本古典文学全集』小学館、一九九六年、四八三頁）

『夜半の寝覚』で、カワセミの羽の青色になぞらえ、黒髪の艶々とした美しさを表現している。

いただきより末まで、つゆおくれたる筋なく、まことに金の漆なんどのやうに、影見ゆばかりつやつやとして

（「浜松中納言物語」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一年、三〇三頁）

『浜松中納言物語』では、金の漆などのように、人の姿が映ってみえるくらい艶々として美しいと表現している。

艶やかで深い黒の髪、そしてそれも身丈よりも長く、髪先はふさふさと裾引いている。そんな髪が愛でられ、そのような髪をもつ女性が美人とされた。

おほかたはたが見むとかもぬばたまのわが黒髪をなびけてをらむ

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、二〇頁）

『万葉集』には、女性が黒髪をなびかせ、積極的に男性を魅惑する歌が詠われている。ということはすでに、黒髪を愛でる意識が万葉の時代にあったということだ。

天皇、日向国の諸縣君の女、名は髪長比賣、その顔容麗美しと聞こしめして

（『古事記』岩波書店、一九六三年、一四三頁）

『古事記』の応神天皇の条に、大変な美人であった諸県君の娘の名が「髪長」比賣とある。その名の通り、髪が長かったのか否かについては、わからない。

髪長比賣の名が美人の代名詞となり、そこから垂髪の長い髪を美とする意識が芽生えたのではないかと考えることもできる。

だが、わざわざ美人とされる娘の名前を髪長比賣とすることは、髪が長いことと美人であることに深い関係があったこと以上のことを、物語っている。

髪長比賣は、のちに仁徳天皇の妃となる。栄華をほこった藤原氏で最も美人とされた藤原芳子は、現実的とは思えないほど髪が長かったとしるされている。

為政者の立場から、髪が長いという表現をもって、意図的に美人を作り出した可能性も捨てきれない。それほどまでに、髪が長いことは特別な意味をもっていた。

黒髪を愛でる一方で、黒くない髪、短い髪は不美人の象徴でもあった。

散る花ぞかしらの雪と見えわたる花こそいたく老いにけらしな

（「うつほ物語：三」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇二年、三九四頁）

『うつほ物語』では、散る花は、頭に積もる白い雪であり、白髪のようにみえると、白髪が老いの表現となっている。

白髪が生えていては、まずかった。もし、白髪をみつけたら、抜かずにはおれない。清少納言は『枕草子』のなかの「ありがたきもの」として、毛がよく抜ける白金の毛抜きをあげている。

白髪を老いとしてとらえるのは、平安時代だけのことではない。

ありつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまで

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、七一頁）

居明して君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふるとも

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、七一頁）

『万葉集』には、天皇、公家から下級官人、防人などさまざまな身分の人間が詠んだ歌が収められている。

そのなかに、仁徳天皇の皇后であり、履中天皇や反正天皇の母である磐之媛命の作とされる歌も収められている。

磐之媛命はとても嫉妬深く、磐之媛命が熊野に行啓したとき、仁徳天皇が応神天皇の娘である八田皇女を宮中に入れたことに激怒し、山城の筒城宮に移り、同地で没したといわれている。

霜が降り積もったかのように、豊かで美しい黒髪に白髪が交じるまで、仁徳天皇が来るのを待ち焦がれていた。磐之媛命の作とされる二首の歌から、『万葉集』が編まれた時代ではすでに白髪が老いの表現となっていたことが読み取れる。

わが袂まかむと思はむますらをは変水求め白髪生ひにたり

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、一八六頁）

白髪生ふる事は思はず変水はかにもかくにも求めて行かむ

（『万葉集：上』岩波書店、一九五四年、一八六頁）

老いは見た目だけの問題ではなく、死に近いことを意味する。そのため、「白髪生ふる事は思はず」と白髪であることは気にしないものの、「変水」を探し求めようという。

天橋も　長くもがも　高山も　高くもがも　月よみの　持てる変若水　い取り来て　君に奉りて　変若得てしかも

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、八四―八五頁）

変水とは変若水のことであり、月にあるという若返りの水を意味している。女性だけではなく男性にとっても、白髪は忌み嫌うものだった。

六十にあまッていくさの陣へむかはん時は、びんぴげをくろう染めてわかやがうど思ふなり

（『平家物語：三』岩波書店、一九九九年、五〇頁）

鎌倉時代に成立した『平家物語』に、七三歳という高齢の斉藤別当実盛が登場する。平安時代末期の武将である実盛は、保元の乱、平治の乱においては上洛し、源義朝の忠実な部将として奮戦した。しかし、義朝が滅亡した後は、関東に無事に落ち延び、その後平宗盛に仕え、東国における歴戦の有力武将として重用される。

寿永二（一一八三）年、平維盛らと木曾義仲追討のため北陸に出陣した実盛は、老人が大将かと思われたのでは仕える主人に申し訳ないと、白髪を黒く染めていた。

実盛が討ち取られ首実検をするために、その首を洗ったところ、髪がみるみる白くなったという。水で洗ってすぐ落ちたとい

うことは、おそらく墨を塗っていたのだろう。

黒く染めることで「わかやがう」、すなわち若々しくみせていた。この白髪を老いととらえ、嫌う意識は平安時代から現代まで途絶えることなく受け継がれている。

しかし、垂髪は歴史的に継続しておこなわれていたわけではない。

今より以後、男女悉に髪結げよ。十二月三十日より以前に、結げ訖れ。唯し髪結げむ日は、亦勅旨を待へ

（『日本書紀：五』岩波書店、一九九四年、一八〇頁）

天武天皇一一（六八二）年四月に、垂髪を禁じる「結髪の勅旨」が定められる。大陸の制度に倣ったためだった。

後ろ髪をまとめて頭頂部で髷を作り、髷の本体は髪の先を分けて二つの輪を作ったもので、余った髪を髷の根元に巻きつけて完成させる高髻とよばれる髪形がおこなわれた。

女の年四十より以上は、髪の結き結かぬ、及び馬に乗ること縦横、並に意の任なり。別に巫祝の類は、髪結く例に在らず

（『日本書紀：五』岩波書店、一九九四年、一九八頁）

しかし、その二年後の天武一三（六八四）年四月には、四〇歳以上の女性と巫祝については例外として「結髪の勅旨」が緩められた。そして、朱鳥元（六八六）年七月になると女性は完全に垂髪が許可される。

大陸の文化や制度を倣って、男性の髻と女性の垂髪を禁じた。だが、大陸の制度を模倣することよりも、むしろ過去よりおこなっている習慣や受け継がれた垂髪への美意識を変えることはできなかった。

それほどまでに、垂髪に対する想いは強いものだった。だが、髪を長く、そして美しく保つことは簡単なことではない。

髪は、一日に何度か梳ることによって、長くなると考えられていた。

はやう住みし所に頭洗ひに行きて　ふる里の板井の中はすみながら我みづからぞあくがれにける

（「赤染衛門集」『賀茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』明治書院、二〇〇〇年、八〇頁）

平安時代の女流歌人、赤染衛門の歌集『赤染衛門集』からは、髪を洗うのに「あく」、すなわち灰汁が使用されていたことがわかる。

この他にも、洗髪や整髪のために、泔という米のとぎ汁、美男葛という実葛の蔓の粘液などが用いられていた。

宮、つとめてより暮れるまで、御髪洗ます

（「うつほ物語：三」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一年、四八五頁）

髪を洗うのも一苦労だった。現代では、毎日のように入浴時に洗っているが、平安の世では一日かかりの大仕事だった。

終日を費やすため、毎日髪を洗うというわけにはいかない。髪を洗う日が、月に何度かと、決められていた。

今日は二十六日だね。嬉しうおす。あしたはかみあらひ日でおすよ

（「通言総籬」『洒落本代表作集』国民図書、一九二七年、四三七頁）

山東京伝が、天明七（一七八七）年に自らの著作である『江戸生艶気樺焼』の登場人物をそのまま借り、当時の遊里の話題、風俗などを実在の人物に取材して描いた『通言総籬』からは、遊女の髪洗いの日が二七日であったことがわかる。

これが、はたして月に一回だったのか複数回だったのかは不明だが、徳川時代になっても、髪を洗うのが大変だったために、日が決められていた。

髪を洗うのはもちろん、それ以上に乾かすのも大変だった。生乾きのままにしておくと、変なくせがついてしまい、長く艶やかでまっすぐな黒髪にはならない。

干し果てさせたまひてこそ。渡らせたまへらば、ただ大殿籠りなば、御髪にたわつきなむず。御産屋のその日のうちにだに入り臥したまひし御心は、御髪ばかりには障りたまひなむや

（「うつほ物語：二」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一年、四八六頁）

髪が乾ききっていないうちに、女一の宮は大将殿によばれる。それを知った右近の乳母は、髪が乾ききってから行った方がよいと諭す。

その理由は、出産したその日のうちに、同衾をのぞむような大将殿であるから、髪が乾いていないことなど気にも留めず求めてくる。だから、髪に変な癖がついたら困るという。

乳母は大将殿に肉体関係を迫られる姫の貞操よりも、せっかく洗った髪に癖がつく。その方が心配だったのだ。

それほどまでに、髪は大事にされていた。「髪の長きは七難隠す」と、髪の長いことは、他の欠点を隠してしまうという諺が、今にも残っているが、何よりも髪の美しさが大事だった。

七月七日になりぬ。加茂川に、御髪洗ましに、大宮よりはじめたてまつりて、小君たちまで出たまへり

（「うつほ物語：一」『新編日本古典文学全集』小学館、一九九九年、一九七頁）

髪を洗っている少女（国際日本文化研究センター　外像データベース）

髪を洗いに加茂川まで、でかけていく。七月七日という季節的なこともあるが、この日が乞巧奠であることに注目したい。

乞巧奠とは、女性が手芸、裁縫などの上達を祈った儀式をさす。もとは中国の行事で、奈良時代、宮中の節会としてとり入れられた。

日本に在来した棚機女の伝説や祓えの行事と結びつき、民間にも普及して現在の七夕行事となっていく。

女性に必須の技芸の上達を願う七月七日に髪を加茂川で洗うことによって、長く豊かで美しい髪を得られると考えられていたのだろう。

ただ、乞巧奠に加茂川に髪を洗いにでかけたのは、女性だけではなく、男女一緒だった。七夕の牽牛と織姫の物語に合わせて、公家たち男女の出会いの場として、この御髪洗が位置づけられていたのかもしれない。

髪の毛を切って竹の根元に埋めると髪の毛が黒くなる

（『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館、一九八二年、二八二頁）

宇都宮地方では「髪の毛を切って竹の根元に埋めると髪の毛が黒くなる」ということわざがある。

竹取の翁夫婦に育てられて輝くばかりの美しい姫に成長したかぐや姫は、あまりの美しさから、五人の貴公子や帝からも求愛される。

そんなかぐや姫は、竹の中から生まれた。かぐや姫にあやかり、自分の髪を竹の根元に埋める。俗信に頼ってでも、美しい髪を手に入れることを願い、女性は竹の根元に自らの髪を埋めた。

宮、こなたに渡らせ給へれば、女君、御汨の程なりけり。人びとも、おのおの、うち休みなどして、御前には、人もなし。小さき童のあるして、「折悪しき御汨の程こそ、見苦しかめれ。さうざうしくてや、ながめむ」と、きこえ給へれば、「げに、おはしまさぬひまひまにこそ、例は、すませ。あやしう、日頃、物うがらせ給ひて、「今日過ぎば、この月は、日もなし。九・十月には、いかでは」とて、つかまつら

せつるを」と、大輔、いとほしがる

（『源氏物語：六』岩波書店、一九六七年、四五―四六頁）

反対に、九月と一〇月は髪を洗うことを忌み嫌った。他にも、四月や五月も髪を洗わなかった。

髪を洗うこと一つが、物事の禁忌と関係し、自由にはならなかった。

髪の長さは身分に関わる

清少納言は髪の長い人を「うらやましげなる」とする一方、「短くてありぬべきもの」として、下衆女の髪をあげている。これは、身分の低い女性の髪は短くしておかなければならないことを意味している。

御膳まゐるとて、女房八人、ひとつ色にさうぞきて、髪あげ、白き元結して

（『紫式部日記：上』講談社、二〇〇二年、一〇七頁）

食事の準備をはじめようと、女房八人が同じ色の衣装を着て、髪を結い上げ、白い紙で束ねる。この髪を束ねるものを、元結とよんだ。

元結の色は、延喜式には「髻結紫糸」とあることから、本来は紫であったのではないかと考えられる。

むすびつる心も深きもとゆひに濃き紫の色しあわせず

（『源氏物語：一』岩波書店、一九六五年、三六頁）

いとをかしげに装束き、みづらゆひて、むらさき裾濃の元結なまめかしう

（『源氏物語：二』岩波書店、一九六五年、一二三頁）

『源氏物語』をみると、加冠に奉仕する左大臣の歌や、光源氏が住吉に詣でたときに帝から賜った童随身にしるされている元結は紫だ。

唐衣、釵子さして、白き元結したり

（『紫式部日記：上』講談社、二〇〇二年、九〇頁）

しかし『紫式部日記』では、食事の準備をする女房、御湯殿に奉仕する女房は白い元結をしている。装飾的に元結を用いるか実用的に用いるかによって、もしくは貴人か否かで、元結の色が異なっていた。

『紫式部日記』には宮中にいる女性であっても、労働に従事するときには髪を結っていた姿がしるされている。

身分の低い女性、すなわち身分の高い女性の世話をする者の髪が長かったら、労働に支障をきたす。

つまり、髪が長いということの美意識は、たんにそれが美しい

からということだけではなく、労働をしなくてもよい、身の回りのことを自分でしないという社会的地位の高さをもあらわしている。

当然のことながら、平安時代の艶やかな長い黒髪という美は、当時の支配者たちであった公家階層のものだった。自らが家事をし、労働に従事している女性たちは、長い髪であれば邪魔になり、髪は短く、もしくは結っていた。

男子皆露紒以木緜招頭

（『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店、一九八五年、一〇九頁）

婦人被髪屈紒

（『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店、一九八五年、一〇九頁）

古代では『魏志』倭人伝によると、男性は皆が頭に何も被らないで木綿を頭に巻き、女性は髪を結っていたことが読み取れる。髪が長いことは生活に支障をきたすことから、髪が結われていた。

肥人の額髪結へる染木綿の染みにしこころ吾忘れめや

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、一七頁）

『万葉集』には、肥後国球磨地方に住んでいたといわれる肥人が額の前髪を括りあげるように、色染めした木綿のはちまきをしていた姿が詠われている。

木綿で髪を括るというのは『魏志』倭人伝にも描かれる古い髪形であり、労働に支障をきたすのを防ぐという意味では、特別な髪形ではない。

しかし、肥人は大和朝廷に従わなかった熊襲に通じる人々であることから、その姿は異習として人々に異様な印象を与えていたに違いない。

藤原氏の氏神であった春日大社の効験を集成した絵巻物『春日権現霊験記絵』には、布によってはちまきのように髪を留めている女性が描かれている。

耳はさみがちに、美相なき家刀自

（『源氏物語：一』岩波書店、一九六五年、四九頁）

家刀自とは、食事の分配などを決める女性、いわゆる主婦のことをさす。耳はさみという、垂れさがる額の髪を耳に挟んで後方にやる姿を、家事が多忙で身だしなみをしない様子であり、賤しいとする。

明け暮れば、耳はさみをして

（「虫めづる姫君」『堤中納言物語』岩波書店、二〇〇二年、三一頁）

平安末期から鎌倉初期に成立したといわれる『虫めづる姫君』の主人公は多くの虫を集め、とくに毛虫を愛玩する少し変わった姫だ。

この姫君は、耳はさみをしており、当時の女性では考えられない行動をとっている。そのような姫君の姿をみた女房は姫君を軽蔑する。

しかしなぜ、垂髪という長い髪をするようになったのか。

垂髪は顔を隠すを要す、故に耳はさみなどは常にせぬことなり

（「嬉遊笑覧：一」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七九年、一三七頁）

徳川時代に書かれた風俗の百科事典『嬉遊笑覧』によれば垂髪は、顔を隠すためのものであり、そのため邪魔だからと耳にかけたりはしない。

たしかに、女性をほかの男性と接触させないようにと、顔隠すという習慣は世界各地でみられる。たとえば、中東の女性が外出して公衆の面前にでるときに用いるブルカやチャードルのように。日本においても、東北地方に「はんこたんな」とよばれる作業着が伝わっている。

しかし、垂髪にしたからといって、顔が隠せるわけではない。だからこそ、扇や御簾、屏風といったものが用いられた。

自分の身体よりも長いのがよいとされる垂髪は、その長さから髪を長く垂らしたままでも障りがない範囲の行動しかしない者だけが、現実的にすることができた。

そんな女性は、侍女をもつ公家だった。すなわち、自ら労働しなくても良いことを表わす長い髪は、社会的地位の高さを表わす象徴として、機能していた。

長い髪が高い身分の象徴となると、短いのはもちろん、髪を結ぶことさえもよしとはされない。

御髪は、こちたくきよらにて、九尺ばかりおはしますを、結いてうちやられたり

（「夜半の寝覚」『新編日本古典文学全集』小学館、一九九六年、三八一頁）

髪を結んでいたのは、病気で寝込んでいるときくらいだった。そういう者たちのあいだで、黒く長い髪を美とする意識が生まれ、その姿に支配される者たちは憧れた。

武家社会で認められた結髪

長い髪と美人の関係は室町時代まで続く。永禄六（一五六三）年に来日した宣教師ルイス＝フロイスは、彼の著書『ヨーロッパ文化と日本文化』のなかで、長い髪について書き残している。

公方の家の日本婦人たちは四つか五つつぎつぎに繋ぎ合わせた鬘をつけ、三コヴァドも後の地上に曳きずって歩く

（『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、一九九一年、四三頁）

三コヴァドとは、一九八㎝。ポルトガル人のルイス=フロイスにとって、女性のあまりに長い髪は、驚きだった。しかし、髪は削がなければ伸びるとはいえ、どれだけ伸びるかは個人差がある。そこで、鬘もしくは髢という添え髪で補った。

ヨーロッパの女性は滅多に自分の髪に他の髪を添えることはしない。日本の女性はシナから商品として渡来する鬘をたくさん買い入れる

（『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、一九九一年、四〇頁）

ルイス=フロイスは、他人の髪を自分の髪に添えるということに大きな驚きをもった。実際にルイス=フロイスが書き残したように、髢が輸入されていたかは、わからない。ただ、髢を作るため必要となる人毛を集める「おちゃない」とよばれる職業があったことから、国内で生産されていたことは間違いない。

洛西、常磐里の婦人、布嚢を頭上に戴き、市中に徘徊し、落は有りや否やと問ふ。もし脱落の髪を蓄蔵する者あるときは、これを買ひて、清水に洗浄すること数編、しかうして後、大小・長短これを択び、これを聚め、婦人の求むるところに随ひて髪の添を造る。近世、男子もまた、冶容にして髪少なき者、他人の落髪を聚め、自己の頭髪に相加ふ

（『雍州府志』臨川書店、一九九七年、二八〇頁）

京都の地理、沿革、神社、寺院、古跡、陵墓、風俗行事、特産物、工芸文化などを詳細に著した『雍州府志』によると、抜け落ちた髪を集めて束ね、それを売る仕事があったことがしるされている。

この集めた髪によって髢を作った。当初、髪が短い女性たちをその商売の相手としていたのが、次第に頭がはげてきた男性も購入するようになったという。そんな髢が、古くから利用されていた。

七八尺の鬘のあかくなりたる

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、二二二頁）

年経ぬるしるし、見せ給ふべき物なくて、わが御髪の、落ちたりけるを、とりあつめて、鬘にし給へるが、九尺余ばかりにて、いと、清らなるを

（『源氏物語：二』岩波書店、一九六五年、一五三頁）

一八世紀初めに刊行された挿絵入りの百科事典である『和漢三

才図会』によると、髢の長さは三四尺（一〇〇㎝前後）だったとされる。だが、『枕草子』や『源氏物語』に登場するものは、もっと長い。

表舞台にでない女性であれば常に、髪を短く、そして束ねていればよかった。しかし、問題なのは、官位があり、主人に仕えながらも、ときとして、公式の席に臨む女性だ。

髪丈にあまり、装束あざやかなる下仕へ、釵子、元結して、二十人出で来て御前に参る

（「うつほ物語：一」『新編日本古典文学全集』小学館、一九九九年、四五〇頁）

主人に仕えているあいだは、髪を結っていても問題はない。『うつほ物語』からは、食前に奉仕する女官は、釵子を用いて髪上げをし、髪の髻を元結によって束ね、釵子から左右に長く髪を垂らしていたことがわかる。

だが、そんな女官たちも、公式の場に臨むにあたっては、垂髪にしなくてはいけなかった。

昔は奥方御息女方神社仏閣詣に下げ髪供侍上下着する也

（「昔々物語」『日本庶民生活史料集成』三一書房、一九六九年、三九三頁）

神社仏閣に詣でるときには、正式な髪形である垂髪にしていた。女官にとって、自在に髪の長さを調整する髢はきっと便利だったに違いない。

『大上臈御名之事』には髢のつけ方がしるされている。

一、かもじゆうこと。まづかみのうゑのきわをびんのかみをのけてゆひて。したをそろへてけづる也。いれもとひして上はとくなり。かもじのおほきすくなきは。若き人と年よりはすくなし。そのほかは、よきころたるべし。かもじのしやくはさだまりたり。人だけによるべからず。あまらばそのまゝたるべし。

一、いれもとひ。ともに五ところゆふなり。いれもとひの次一そくほどおきて。水引にてゆふなり。水ひきのぶん二ところなり。いづれも一そくといへども。いれもとひと水ひきのあひはすこしひろく見ゆるやう成べし。さて又其下を三ぞくほどひきさきてゆう也。若き人は水ひきのところを一ところゆう也。以上四ところなり。廿八の春より五ところゆう也といへども。たゞわかきときより四所ゆうなり。

一、水ひきもひつさきも。ゆひやうおなじ事なり。ふたへまはして。ひだりの方にわなのあるやうに有べし。みぎにはもろ口あるべし。

一、ながさにはさみてきるなり

（「大上臈御名之事」『群書類従』続群書類従完成会、一九六〇年、

一六―一七頁）

「いれもとひ」とは入元結のことで、紙を巻いて芯にした丸い棒状の物。長い髢用であり、これを一重に一番上に結んだ。さらに、水引で二カ所結んだ。「ひつさき」とは小引裂のことで、和紙をたたみ細い平元結にした。

寛永の比迄は、婦女細き麻縄にて髪を束ねて、其の上を黒き絹にて巻きしに、其の後麻縄をやめて紙にてゆふ。越前国より粉紙にて、元結紙と云ふものを造り出だし

（「独語」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七六年、二八五頁）

入元結も平元結も、元結という髪を束ねる紙だ。古くは麻糸や組紐を用いていたが、徳川時代初期から元結紙でこよりを作り、水糊を塗ったものを用いるようになった。

太宰春台が著わした芸能、風俗の変遷に関する評論随筆『独語』によると、寛永期（一六二四年～一六四四年）から髪の髻を結ぶ紐が使用されはじめた。すなわち、髪を結いはじめたわけだが、それにともなって「伽羅油」や様々な髪飾りが登場した。

本結、もと髪捻といふ。中華にいはゆる髻なり。倭俗、杉原紙あるいは奉書紙または長永紙、幅一寸ばかりに直にこれを切り、長二三丈にこれを捻る。これを、髪捻を捻るといふ。しかうして後、水あるいは米泔に浸し、しかうしてこれを取り出し、左右にこれを牽き張り、布巾をもつて緊急にこれを拭ふ。これを凌くといふ。しかうして、日に乾し、短長その欲するところに随ひてこれを截り、髪を束ねてこれを結ふ

（『雍州府志』臨川書店、一九九七年、二八〇頁）

『雍州府志』によると、杉原紙、奉書紙、長永紙を幅一寸に切り、二三丈に捻り、水に浸して固め、必要な長さに切って用いた。

反対に、自身の髪が長い場合には、結うのも解くのも簡単な方法で処理をした。

みやづかへなどせぬ時。また道など行時。かもじ長くてわろき時は。したのゆひたるところを右のかたにわなのあるやうにかみをわけて。さてしものゆひたるところに。べちのひつさきにてゆひつくるなり

（「大上臈御名之事」『群書類従』続群書類従完成会、一九六〇年、一八頁）

主人に仕えていないとき、また道を行き交うときに、長い垂髪が邪魔になることがある。そんなときは、自らの髪で輪を作り、そこに髪を通して結ぶことで整えた。

また、髪をぐるぐると巻き、笄で仮止めがされる笄髷という髪

形もあった。

かうがひわげは下髪せし奉公人など其つとめをしまひ。うち〳〵の局などにいりくつろぎ。又はをのがじじうち寄比下髪は身持むづかしきゆへにぐる〳〵とまはしてかうがひにて仮にしめをきたるなり

（『女用訓蒙図彙：五・中』だるまや書店、一九一七年、三頁）

笄とは、髪を掻き揚げて髷を形作る装飾的な結髪用具のことだ。この笄に髪を巻きつけて髷をつくった。

笄を懐にもちたらんと推量するよしは、むかしの女も今とおなじくかしらの痒き時爪して掻くはいやしく且つ無礼なれば髪掻をかうがいとさへ古く訓たる物なれ

（「歴世女装考」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七五年、二二一頁）

だが、笄そのものは、もともとは頭を掻く物だった。

かうがいは髪かきなりゑぼしをかぶりかぶとをかぶる故頭のいきこもりてかゆくなるものなり其とき手にてはかゝれずかうがいにてかくなり

（「軍用記」『故実叢書』明治図書出版、一九五四年、二五三頁）

徳川中期の有職故実家伊勢貞丈が、宝暦一一（一七六一）年に軍陣の作法を子孫に伝えるために集成した『軍用記』のなかで、笄は頭を掻く物としてしるされている。

武士は笄を太刀に差して収納し、髷が痒くなったときや、髪が乱れたときに使用していた。

御くし・かうがいぐし給へりけるとりいでゝ、つくろひなどして

（『大鏡』岩波書店、一九六四年、一六一頁）

大酒飲みの内大臣道隆は上賀茂神社参詣の途中、車のなか泥酔しているのを弟の道長によって起こされたとき、乱れた鬢を整えるために笄を使用している。

ひめ君、檜皮色の紙かさね、たゞ、いさゝかに書きて、柱の干割れたるはざまに、笄の先して、押し入れ給ふ

（『源氏物語：三』岩波書店、一九六五年、一八三頁）

頭を掻き、また髪の乱れを整えるだけではなく、真木柱の姫君が柱の割れ目に紙をさし入れるのに笄を使用している。笄が、男女を問わず日常的に携帯され、使用されていたことがわかる。

笄髷といふ髪の風京より起り諸国にうつれり、其結ぶりは笄

を髪の根もとにさしこれに髪を巻きつけて状をなすなり

（「歴世女装考」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七五年、二二五頁）

そんな頭を掻く道具だった笄を利用した笄髷は、京よりおこったといわれている。もちろんこれは、京が公家社会だったからだ。

垂髪が正式な髪形であった時代でも、一部の支配的地位にいる者をのぞいて、私的な空間では髪が結われた。それが、支配的地位が公家から武家へと変わることによって、次第に垂髪から結髪が公的な場においても認められるようになっていく。

いつ見ても鬘でもかぶったように後れ毛一筋なく

（「武家の女性」『山川菊栄集』岩波書店、一九八一年、一〇〇―一〇一頁）

水戸藩士青山延寿の孫であった山川菊栄は、『武家の女性』のなかで髷が結われていたことを回想している。

後れ毛を嫌い徹底的に髪を結い上げるだけではなく、際墨という額の生え際に墨を施し、額の形を美しくみせる化粧もおこなった。

きずみのあまりにくろきは、たゞにんげうなど色どりたるやうにていとすさまじ

（「女郎花物語」『古典文庫』古典文庫、一九七〇年、一六六頁）

際墨をやりすぎると人形のような印象を与えると、『女郎花物語』は批判している。人形のような髪形は、武家社会における武士の剛気、勇猛、威武を、女性に与えるものだった。

結髪は、装飾性から生じたものではなく、支配的地位にいる者の入れ替わりと、日用上の便宜から、次第に変化した。

ちなみに、武家社会の男性の髪形といえば、「月代」が思い浮かぶ。頭髪を、前額側から頭頂部にかけて半月形に髪を剃り落とし、後頭部の髪を束ねて頭頂部に置いた髪形だ。

月代といっても、その種類は、大月代、半頭、中剃と大きく三つに分けることができる。大月代は鬢と後頭部の毛を残して額まで剃る月代、半頭は頭髪を前半分だけ剃って後ろのほうを残しておく月代、中剃とは頭の中央部の髪のみを剃り去る月代である。

なぜ、このような髪形が生まれたのか。

戦の時、常にかぶとをかぶり気のぼせて煩う事あるにより、頭の上を丸く中ぞりをしけるなり

（『貞丈雑記：一』平凡社、一九八五年、一一五頁）

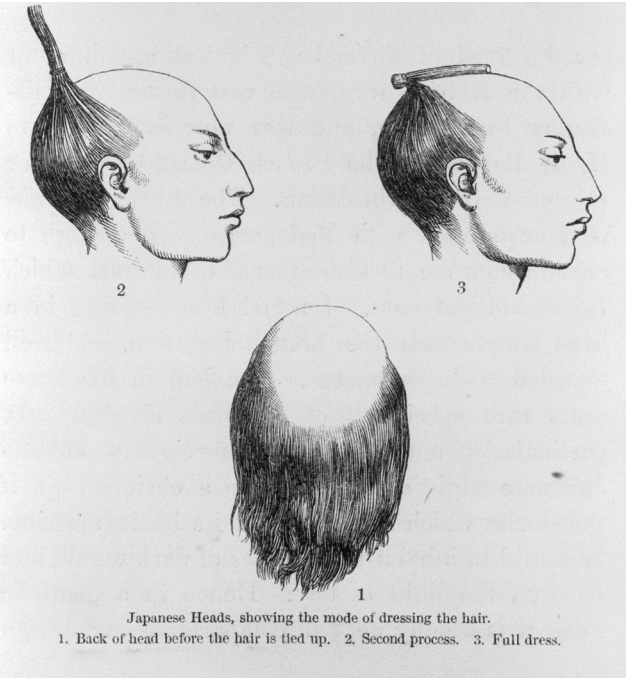
戦に臨む者は兜を被る。すると、次第に兜のなかに熱がこもる。そのため、頭が蒸れないようにと髪を剃ったのが月代のはじ

まりだと、伊勢貞丈は徳川時代の有職故実書である『貞丈雑記』のなかに書き残している。

なぜ、「さかやき」とよぶのか。

「さかいき」と云ふは、気さかさまにのぼせるゆえ、さかさまにのぼするいきをぬく為に髪をそりたる故「さかいき」といふなり

（『貞丈雑記：一』平凡社、一九八五年、一一五頁）



男性の結髪方法（国際日本文化研究センター　外像データベース）

兜をかぶると気が逆さに上るため、その気を抜くことに由来して、月代＝サカヤキとよぶのだと、伊勢貞丈は考えた。

昔の月代は。冠下に月額を入るゝ事にて。日本紀に冠サカとよめり。又鶏冠トサカといふにおなじ。ヤキは鮮やかの約。鮮は明サヤカの約。冠下の額に角を剃り入るゝ事。却月のごとく。其跡鮮明なるゆゑ。サカヤキは冠明なり。冠の半額を半月形ともいへば。もとは冠下の粧より出でたる名なり。その形。月の出でしほに似たるを以て。仮名文には月しろとよめり

（「茅窓漫録」『日本随筆全集』国民図書、一九二七年、四二四頁）

だが、これについて諸説ある。『茅窓漫録』という徳川時代の随筆では、トサカに由来するという説をあげている。

戦国時代までは、武士も終始、月代にしていたわけではない。

合戦の間は月代をそれども、軍やめば又本のごとく惣髪になるなり

（『貞丈雑記：一』平凡社、一九八五年、一一五頁）

戦のないときは武士も月代をすることなく、髪は伸ばしたままだった。頭頂部以外は、つねに長いままである。それは、髻を結うためだ。

奈良時代に隋や唐の文化が輸入されて、冠によって身分の高低を示すようになった。そのため冠をかぶるのに便利な髪形として髻が考え出される。

髻を解いてざんばら髪、裸のまま太刀を持って出ていった

（『今昔物語集：五』平凡社、一九六八年、三四九頁）

冠や烏帽子をかぶらないで髻をあらわにした男が太刀を抜いていたと『今昔物語集』にあるが、髻は冠や烏帽子をかぶるためにおこなわれた。髻によって、冠のずれを防ぐためだ。

翁のもとどり放ちたる

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、一七六頁）

冠や烏帽子をかぶらずに髻をあらわにだすことを「髻を放つ」とよび、清少納言は髻を放った姿をぶざまだとしている。

平安時代以降、次第に冠をかぶることが庶民にも普及し、かぶり物がないのを恥とする習慣が生まれた。月代はあくまで頭頂部の髪を剃ることであり、武士は髻を結うためには髪を伸ばしていた。

そして、戦がないときには必要性がないため月代をせず、前髪を後ろに撫で付けて、髪を後ろで引き結ぶ総髪にしていた。

にもかかわらず、なぜ武士といえば月代という印象があるのか。その理由についても、伊勢貞丈はしるしている。

天下大いにみだれ、信玄・謙信などその外諸大将、合戦数年打続きたるゆえ常に月代そる事絶えずして、その後太平の世になりてもその時の風儀やまずして、今日に至るまで月代そる事になりたるなり

（『貞丈雑記：一』平凡社、一九八五年、一一五頁）

戦国時代になり、絶えずして戦がおこなわれるようになるにあわせ、平生から月代がおこなわれるようになる。

戦乱の世では、いつ戦がおこるかわからない。そのため、常に月代がおこなわれ続けた。この月代は、一体どのような方法でおこなわれていたのか。

むかしは、けしきとて髪をぬくものを以て、額の上を少ぬきし

（「和漢事始：一」『益軒全集』益軒全集刊行部、一九一〇年、七〇六頁）

貝原益軒の『和漢事始』には、「けっしき」という毛抜きで髪を抜いていたとしるされている。毛抜きといっても、当時は木の板で挟んで抜くようなものだった。

おのこのひたひ毛、頭の毛をば髪剃にてもそらず、けつしきとて木を以てはさみを大にこしらへ、其けつしき頭の毛をぬきつれば、かうべより黒血流れて物すさましかりし也

（「慶長見聞集」『江戸叢書』日本図書センター、一九八〇年、一〇一頁）

抜いた後は、血まみれになり、すさまじい光景であったと『慶長見聞集』の作者である後北条氏の遺臣三浦浄心は書き残している。

その苦行ともいえる月代に、解決策を見出した人物がいた。織田信長である。

信長公髪をぬきて、益なく頭のいたむ事をうれひて、剃刀を用給ひし也。其いにしへは髪をそる事、僧尼の外は、きはめていま〳〵しき事にせしとかや

（「和漢事始」『益軒全集』益軒全集刊行部、一九一〇年、七〇六頁）

あまりの痛さからか、髪を抜くことが我慢できなくなった織田信長は、抜くのではなく剃ることを思い立つ。それまで髪を剃るのは、僧侶のすることだった。そのため、剃刀も、仏具の一つだった。

僧が髪やひげを剃り落とすのは、そこに煩悩が宿るからだといわれる。すなわち、僧が髪やひげを剃るのは悪霊に取り懸かれないためだった。

徳川家による天下統一がなされたあとも、約一〇〇年ものあいだ続いた戦国時代のなかで、武士の髪形は月代と定着した結果、月代がおこなわれ続けた。

そして次第に、月代をすることが、一人前とみなされるようにもなる。それは、成人になるという意味で月代が一般化し、元服を意味する習俗として確立したからだ。

そしてついには、月代が正式な髪形となっていく。

予当年今に年始墓参せざる故に今日参詣可至処今に長髪に付不能其儀

（『馬琴日記鈔』文会堂書店、一九一一年、一三頁）

滝沢馬琴の『馬琴日記鈔』には、天保五（一八三四）年三月二六日の日記に月代を生やしているために墓参りができなかったと、しるされている。

つまり徳川時代、月代を剃ることが常識となり、身だしなみとなったことをも意味している。

月代も結髪も、戦に明け暮れた不安定な時代を反映している。支配的地位にいる者の入れ替わりにより、結髪が認められるようになっただけではなく、結髪が垂髪から美の対象に移り変わっていった。

髪を束ねるという実用性から生まれた結髪は、身分や年齢に

よって一定の形式があるものの、自分の顔立ちや容姿に調和し、美しくみせるために存在していく。

また、笄や簪なども髪をとめる道具としての実用性を離れ、装飾品となっていった。

結髪が美の対象へ

結髪は、働きやすく便利なように、様々な工夫のもとにおこなわれた。

> 今は昔のかたものこらず。昔の婦人は、髪多く長きを、たたけにあまるなど云ひて誉めしに、近比は髪少く短きをよしとする風俗になりて、髪多き女は髻の内を、或はきり或は剃りて少くする
>
> （「独語」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七六年、二八五頁）

髷、すなわち髪形の基本は頭頂で束ねて、折り返したり、曲げたりして整えることにある。似た言葉に、髻がある。

「たぶさ」とも「もとどり」とも「みずら」とも読まれるが、共通して髪の毛をまとめて頭の上で束ねることを意味している。

頭頂で束ねて、折り返したり、曲げたりして整えるといっても、髪を一束にしてまとめることは少ない。多くの場合は髪をいくつかの部分に分けて結い上げることで、多様な髷を作り出している。

髪を結うとは、前髪、鬢、髱を結うことである。前髪とは額の前に垂らした髪の部分、鬢とは耳ぎわの頭髪の左右側面の部分、髱とは後頭部の髪の部分を指す。

関連して、「うなじ」という部分がある。首の後ろの部分であり、えり首や首すじに相当する。

これら、前髪、鬢、髱に囲まれた頭頂部の部分に髪を集め、「根」とよばれるものをつくり、それを中心として髷が作られていく。根の位置は、髷の形によって前方、中央、後方と変化する。

結うためには、あまりに髪が長いと結いにくいため問題であり、結いやすいように髪を削ぐ。また、髷が頭の頂上部分で安定するように、この根の部分に「中剃り」とよばれる技法が使われだす。中剃り、つまり根にあたる部分の髪を剃った。

髪の毛の多い人は苦労する

（『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館、一九八二年、二八二頁）

宇都宮や赤穂周辺で使用されることわざに、「髪の毛の多い人は苦労する」というのがある。髪の量が多いと、結うのが大変というところからきている。

『独語』の作者であり、徳川時代中期の儒学者であった太宰春台は、晩年の延享期（一七四四年～一七四八年）の風俗の変遷について、この髪を短くし少なくする風俗についてしるしている。だ

が、その理由は『独語』からはわからない。

しかし、髷を美しくみせるために髪を削ぎはじめたことは、髪が長いことが美人の象徴であった時代が終わりを告げたことを意味している。

そんな髷は、基本的には頭上に輪をつくり根に毛先を巻きつけた兵庫髷、髻を折り返して元結でとめる島田髷、髷が大きな輪になっている勝山髷、笄で髪をとめる笄髷の四つの系統に分けることができる。

この基本をもとに様々な髷が生まれ、その数は数十種類にもおよぶようになる。たとえば、島田髷には、文金高島田、しめつけ島田、投島田、手巻島田、高島田、つぶし島田、結綿などがある。

それぞれには、御殿風、武家風、町方風などの社会的な階級の違いが反映された。そして、京風や江戸風という地域の違い、既婚、未婚の区別だけではなく、新婚、懐妊中、年増、後家など、女性の生活環境の変化にともなって結髪が変わっていった。

同じ兵庫髷でも、遊女は結び兵庫、町娘はうつを兵庫。島田髷なら、御殿勤めは辰松島田、町娘は小枝島田、夫に死別された女性は後家島田。結髪をみれば、その人がどんな立場にいるかがわかった。

兵庫鬢は、一説に大橋柳町の頃、兵庫屋と云遊女屋より起るといへり、いかにも遊女の髪の風見ゆれども、其真偽慥ならず、思ふに摂州兵庫の町の廓風故、斯いへるにや云々、又島田は寛永年中、京都四条にて女歌舞妓のありし頃、島田花吉といへる舞女の初めたるよし、又勝山は此里の名妓勝山の結初めたる由

（「北里見聞録」『近世文芸叢書』国書刊行会、一九一一年、一七八頁）

これらの髷の名称がどのように決まったかについては、徳川時代より定かにはなっていない。

たとえば、兵庫髷は兵庫屋の遊女が結ったから、また兵庫の町の遊女が結ったからという説がある。

嶋田より、こゝまでかゝれども。つゐに、歌ぶくろの緒がとけぬといふ。馬かた聞て、嶋田の事ならバ。髪をゆふたる事を、よみたまへかしといふ。これに心づきてはたご屋の女はちりのつくもがみせめて嶋田にゆふよしもがなとよみたり。げに〳〵、春元の発句に名にゆふげにも嶋田の柳髪といへる面影侍べるとて

（『東海道名所記』平凡社、一九七九年、二一六頁）

島田髷については、『北里見聞録』では島田花吉に由来するとされるものの、仮名草子作家である浅井了意の『東海道名所記』をみると、東海道五十三次の二三番目の宿場である嶋田宿から、

島田髷が連想されていることがわかる。

昔女のかみのゆひやうは、みな名所の名におふといふ、まづ兵庫又は島田など、いづれも所の名じやと云

（「私可多咄」『近世文芸叢書』国書刊行会、一九一一年、七二頁）

万治二（一六五九）年に中川喜雲がしるした『私可多咄』によると、髷の名称は地名に由来するとある。だとすると、兵庫髷の場合は兵庫町という説が正しいように思われる。

しかしながら、必ずしも地名だけが名称の根拠になったとは考えられない。むしろ、誰々が結っている髷という意味で、人名に由来している説も妥当といえる。

勝山と云風あり宝永の始に大坂より勝山奏と云若女形下り始て髪を大輪に結ぶ是風を勝山と云

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五二頁）

勝山髷、勝山仙列はじめて結しより流行、（或説に曰、江戸吉原巴屋勝山と云女郎始むとも云）

（「近来見聞　噺の笛」『新燕石十種』国書刊行会、一九一二年、九一頁）

江戸にて丹後殿前に風呂ありし時、勝山といへる女すぐれて情もふかく、髪かたちとりなり、袖口広くつま高く、萬に付けて、世の人に替りて、一流是れよりはじめて、後はもてはやして、吉原にしゆつせして、不思議の御かたにまでそひぶし、ためしなき女の侍り

（「好色一代男」『近代日本文学大系』国民図書、一九二七年、一七頁）

勝山髷であれば、人名に由来するという説が主流であるものの、『我衣』や『近来見聞　噺の笛』における歌舞伎役者勝山奏、勝山仙列、また『好色一代男』の湯女であった勝山など、その人物には諸説ある。

そこに共通しているのは、歌舞伎役者か遊女に由来することだ。

此頃市中色里に、路考茶と云ふ染色大ひに流行する事、右路考顔見世芸のせつ、こし元お百となり、女占ひの着付に此茶染の衣装を着しより、是を路考茶とよびて専ら流行し、今に至つて此茶を世人用る事とはなりぬ、

因に云、むかしよりかよふの類ひまゝある

（「近来見聞　噺の笛」『新燕石十種』国書刊行会、一九一二年、九一頁）

徳川時代の読本作者である暁鐘成は、髷が歌舞伎役者の人名に由来するのは、路考こと二代目瀬川菊之丞の絶大な人気から、腰

元お百の衣装の茶色を路考茶とよんだように、舞台での役者の髷が真似されたことに由来するという。

歌舞伎は、出雲阿国が慶長八（一六〇三）年に京都で創始した。阿国のはじめた歌舞伎は、煽情的な芸であった。

これを遊女たちがならい、たちまち大流行するに至った。『慶長見聞集』によると、当時、佐渡島正吉、村山左近、岡本織部、小野小太夫、出来島長門守、幾島丹後守らが有名な遊女歌舞伎の師匠だった。

遊女が主役の遊女歌舞伎は風俗を乱すという理由で寛永六（一六二九）年に禁止され、若衆が女役を演じるようになった。この若衆歌舞伎も、男色によって風俗を乱すとして承応元（一六五二）年に禁止される。しかし、歌舞伎は一八世紀後半期で約一〇〇〇両の利益をあげるまで、人気を得た。

歌舞伎の背景を考えると、役者の絶大な人気から、その役の髷が真似されたことは考えられる。しかし、いくら人気があったとはいえ、舞台でみただけの役者の髷を、そう簡単に真似ることが果たしてできただろうか。

また、遊女歌舞伎は遊女屋が座を組織して、売色の効果的な手段として興行した。

つまり、遊女歌舞伎は客に自分の姿を見せる張見世的な興業であり、女性ではなく男性がみることを前提としている。

庶民の女性たちが娯楽であっても、髷を真似るほど頻繁に遊女歌舞伎に出かけていたとは考えにくい。

女髪結の登場と髷の多様化

本来、結髪は女性の自分自身の手によっておこなわれていた。

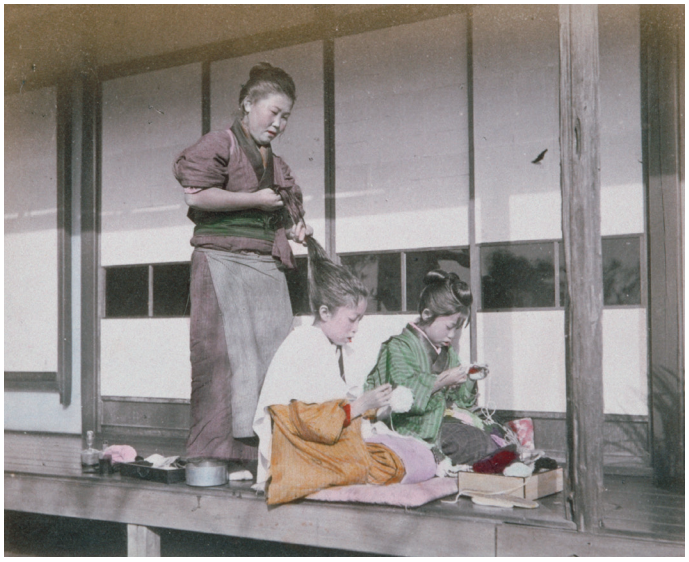
昔は遊女も髪を手づから結はざるを恥としたる事にて、女の髪ゆひなどいふものは、たえてなきことなり。女髪結の出来たるは後の事にて、女の文書といふもの多く有たり。よき手の女に文を頼みて書かする時は、文一通にて料百銭を取りたりと、古老の物語を聞伝へたる人有。左も有べき事にや。筆の道はいとも尊き事にして、無筆の者の心には、ものかゝざるをうへもなき恥かしき事に思ふべし

（「萍花漫筆」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七四年、三五七頁）

随筆『萍花漫筆』によると、遊女にとって自分で自分の髪が結えないことは、文字が書けないことと同じくらい無教養とされていた。もちろん遊女だけではなく、それは一般の女性にもあてはまる。

徳川時代中期になると、髪を自分で結わない女性もあらわれはじめた。それには、髪を結うことを生業とする女髪結の登場が関係している。

髪結とは、月代を整えることを生業とした者のこと。本来は男性だけに許可された職業である。



縁側で手芸をしながら髪を結ってもらう少女（国際日本文化研究センター古写真データベース）

江戸中髪結株一町に、一ヶ所ヅヽ、八百八株に定る

（「武江年表」『江戸叢書』江戸叢書刊行会、一九一七年、五四頁）

『武江年表』の万治元（一六五八）年によると、髪結の株は、江戸では一つの町に一カ所、全部で八〇八カ所に限ると定められていた。客は男性であり、ほとんどが武士だった。髪結をしていた者は勤め先を失った浪人が多かったとされる。

そして、女髪結とは、女性の髪結のことであり、女性の髪を結うことを生業とした。なぜ、女髪結が生まれたのか。

それには、数十種類にもふえた髷の結い方の多様化が関連している。

女中のかみもしゆす鬢・鳥籠鬢・びんはり・添櫛・添釵・いれづと・わき鬢よといろ〳〵のはやりことかはり行、昔なかりし中分已下に女中の髪結所々に出来、放蕩な女はみな結髪にゆはするようになれり

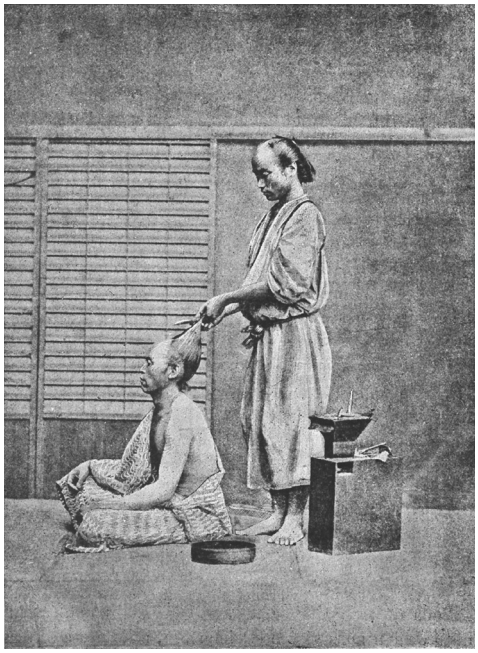
（『嬉遊笑覧』岩波書店、二〇〇二年、一七九頁）

喜多村信節は、安永六（一七七七）年に西村遠里のしるした『居行子』を引用し、結髪の技法が精巧な髪形が流行し、自分では結えなくなったために、髪結に髪を結わせるようになったと説明する。

いやむしろ、女髪結の登場が髷の多様を生じさせた。

天保十五年辰、大坂板に二千年袖鑑と云ふ、事物の始源の年数のみを記したる物に、女髪結は明和七年より始まるとあり。思ふに、件の金作がかづらつけ妓の髪を、後には女髪結を渡世したる毛筋立といふ物、彼の百が創立して作れりも、大坂の風によりたるなるべし。しかりとすれば、女髪結いは

女髪結（国際日本文化研究センター　古写真データベース）



髪結（国際日本文化研究センター　外像データベース）

大坂を始とすべし

（「蜘蛛の糸巻」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七四年、三〇四頁）

山東京伝の『蜘蛛の糸巻』によると、明和期（一七六四年～一七七二年）に山下金作という女形の歌舞伎役者が江戸深川に住んでいた。この女形の鬘付が、贔屓にしていた遊女の髪を役者のように結ってやった。

その髪形が、あまりにも見事だったので、遊女の仲間も金銭を支払って、自分の髪も結わせた。それが繁盛したため、ついに鬘付をやめて髪結になった。

そして、この髪結の弟子に、甚吉という者がいて、さらに甚吉が女の弟子をとって遊女を結って回った。これが明和七（一七七〇）年頃であり、女髪結のはじまりといわれている。

しかし、異説もある。

女の髪結といふもの近世盛んに成れり其初めは明和のはじめ江南俳優家の金剛と呼なすもの丶妻が妓婦の髪を結ひしより始れり享保十二年正月竹本座のあやつり敵打末刻の太鼓下の巻になんぼ大坂じやといふて姫ごぜの髪ゆひと男の取揚婆はござんせぬと書たりしに四十年も過ざるうちに男の取揚婆は知らず女の髪結ひは出来ぬ

（「南水漫遊」『新群書類従』第一書房、一九七六年、五三〇頁）

日本の女性と少女の髪形（国際日本文化研究センター　外像データベース）

浜松歌国が文化一四（一八一七）年頃にしるした歌舞伎や浄瑠璃関係の記事を集めた演劇書『南水漫遊』には、宝暦期（一七五一年～一七六四年）はじめに歌舞伎俳優の身辺雑用をする金剛の妻が、遊女たちの髪を結ったことが女髪結のはじまりとしている。

しかしながら、演劇評論家の伊原敏郎がまとめた『歌舞伎年表』（岩波書店）をみると、延享五（一七四八）年七月に、京の粂太郎座公演「けいせい紅葉軍」の狂言で中村富十郎が「女髪結おつけ」を演じている。

ということは、京と江戸でほぼ同時期に女髪結が登場するものの、京では延享五（一七四八）年にはすでに女髪結が存在したことが推測できる。

江戸に女髪結できしは天明の末寛政の初ごろよりなるべし、売色たぐひの者どもの結はせしことなりしがやう〳〵行はれ

（「嬉遊笑覧：一」『日本随筆大成』吉川弘文館、一九七九年、一八三頁）

寛政期（一七八九年～一八〇一年）の初め頃は、女髪結に髪を結わせるのは遊女だけだった。一般の女性が、女髪結をよんで髪を結わせたりしたら、茶屋者のようだ、贅沢だ、として非難の的になった。

近年女かみゆひ行れてより。或は月極メ。あるひはふり。ふりの本結は二百に極る。本多は百に。なで付は五十

（「当世気とり草」『日本名著全集』日本名著全集刊行会、一九二九年、一一〇頁）

安永三（一七七四）年に刊行された洒落本『当世気とり草』は、結髪の価格が数百文に及んでいたことをしるしている。

寛政の初めは女髪結と云ふもの至て稀なり堺町近辺の三光新道に下駄屋のお政とて髪結銭百銅にて結しも今は類多き故か十六銅にて結ふも有

（「寛天見聞記」『燕石十種』国書刊行会、一九〇八年、一一七頁）

寛政天保期（一七八九年～一八四四年）の風俗をまとめた『寛天見聞記』によると、結髪の値段は一〇〇文だったという。しかし、女髪結が乱立してくると、その価格は下落していく。

御壹人前三十二孔

（「浮世床」『日本古典全書』朝日新聞社、一九七一年、六八―六九頁）

文化一〇（一八一三）年に刊行された式亭三馬の滑稽本『浮世床』では、結髪の値段は三二文となっている。この頃の下女の給金が日当五〇文だった。ある程度無理をすれば、庶民でも女髪結を使える範囲の価格まで下落した。

とはいうものの、その値段はけっして安くはない。だが、女髪結の需要は減ることはなかった。『浮世床』には、髪結の大変さがしるされている。

日髪月究の客多くて。朝から晩まで立続けに結て居る故。痔の無い者も痔持になる

（「浮世床」『日本古典全書』朝日新聞社、一九七一年、六八頁）

つらい所か業の習時分には腰が痛くてからつきり伸びねへぜ。剃刀をもつた手が棒のやうになつて櫛へ移る時手子摺切るはナ。日がな一日腰を折居て俯向てばかりゐるのだから逆上て目が眩むはナ

（「浮世床」『日本古典全書』朝日新聞社、一九七一年、二〇四頁）

経済的に豊かな者だけではなく、その日暮らしの者までもが、自分で髪を結うことなく、女髪結をよぶようになった。

それは、流行の髷をすることで、少しでも他人より美しくなりたいという想いが、女性にはあったからだろう。結果として、髷は華美となっていく。

より美しく、華やかに

従来、徳川時代の女性の髷は、娯楽の場であった劇場やそこで上演される歌舞伎の登場人物の髷が真似されたとする指摘が多数を占めている。

たしかに、歌舞伎役者の髷が一つの見本となった可能性はある。しかし、髷の複雑な結いを、観劇中にみただけで果たして真似が出来たかどうか疑問が残る。また、張見世的な興業としての歌舞伎に、どれだけの女性が観劇していたか、わからない。

甲斐々々敷女ナリシガ。糟毛ナル髪ヲカラワニ結ビ

（「小松軍記」『群書類従』続群書類従完成会、一九六〇年、三一一頁）

前田利長と丹羽長重の戦いを描いた『小松軍記』には、白髪交じりの髪を唐輪に結っている武家の女性が描かれている。唐輪とは、髻から上を二つに分けて、頂で二つの輪に作る髪形だ。

武家とは土地を耕し、守る者だ。また、公家などに仕え家政、警固の任にあたる者でもあった。つまり、何かしらの労働に従事する者である。

武家の女性は公家とは異なり、自らが労働をしなくてはいけない。そのため、もともと垂髪ではなく結髪をしていた。また農民や町人たちも、結髪だった。労働に従事する女性のあいだでは、髪が結われていた。

髪の結様を一流工夫して、世上多く時花りて、勝山むすびと名付け、其風至極寛にして、伊達ならず、後は諸侯、太夫の室も是をまなび、今専ら士農工商の女房、娘、勝山と云髪を用る事也

（「近世江都著聞集」『燕石十種』中央公論社、一九八〇年、二八頁）

江戸の講釈師であった馬場文耕は、将軍、旗本などの実名で、品評、巷間の噂話など風聞にあがった人物の来歴や事件を『近世江都著聞集』のなかでまとめている。そこでは、勝山髷を武家の女性が真似て結いはじめたことがしるされている。

歌舞伎役者の髪を結っていた者たちが、髪結となる。女髪結の登場によって、遊女や庶民の女性たちの髪が結われ、髷は技巧的になっていく。

この事実は、庶民の女性たちが歌舞伎の髷を自分自身で真似たのではなく、女髪結が歌舞伎役者のような髷を庶民に広めたことを物語っている。

姑六十年以前の事を（延享よりいへるは貞享のむかしをいふ也）定規にして昔も今も同様に思はれ、嫁の髪みるに髢の内に鯨の墨遣を二、三本も入るゝ、何の為。吾はこの年迄髪の中に小枕の外は蒔絵の木櫛に黒き笄をさして花をやりしに、

嫁のあたまを見れば透とをる玳瑇の櫛をさし、笄の前にかんざしとやらいふものをさゝるゝは何の用に立事ぞ。時代ちがひの姑の目からは、弁慶が七道具をいたゞくと思はるゝは無理でなし。凡具筋より上ばかりに入物廿一、二品も有

（『嬉遊笑覧：一』岩波書店、二〇〇二年、一七三―一七四頁）

喜多村信節は、江島其磧のしるした『賢女心化粧』を引用し、髪を結い、飾るための道具が飛躍的に増加したことを書き残している。

遊女の髪形いろいろ（国際日本文化研究センター　外像データベース）

近世、吉原町の遊女は島田曲背高なり。これ見世を張る時、正面より見て立派を専らとする故なるべく、特に簪櫛も数多く大形なる故に、曲低ければ隠るゝが故なるべし

（『近世風俗志：二』岩波書店、一九九七年、一九九頁）

格子のなかの遊女（国際日本文化研究センター　外像データベース）

吉原の遊女は客に顔をみせ、指名を待つ。そのために、見世の格子内に並んでいた。このとき、少しでも立派に美しくみえるように、髪を高く上げ、髷を結った。

だからこそ、自らの手ではなく、髪結に髪を結わせた。結うだけに留まら

ず、簪や櫛なども実用性から離れた装飾として大きなものが使われだす。

結髪は本来、垂髪による行動の不自由さを解放するためのものだったが、結い方が技巧的にそして華美になるにつれて、かえって、日常生活の煩雑さを生み出してしまったのかも知れない。

かみのうへは小間物屋の見せの如く

（「通言総籬」『新日本古典文学大系』岩波書店、一九九〇年、九六頁）

元禄期（一六八八年～一七〇四年）の遊里の話題、風俗などを実在の人物に取材して描いた山東京伝の『通言総籬』には、遊女の髪が「小間物屋の店のようだ」としるされている。これは、おびただしい装飾品によって髪が飾られていた髪を、なかば揶揄している。

多様な髷が結われるようになるにつれ、それを装飾するためにいろいろなものが使われたことを、小間物屋と山東京伝は表現した。一体、どのようなものが使われたのか。

まずは、髪を固めたり乱れを防いだりするのに用いる髪油をみておきたい。頭皮を清浄にし、髪の艶色を保持し、櫛けずるのを容易にするために、髪油は用いられた。

実葛の茎の粘液、椿、丁子、胡桃、胡麻子、菜種子などの植物油を用いたりした。植物以外にも、動物油や魚油も用いられることがあった。

そんな髪油に、伽羅油とよばれるものがある。

大坂落城の時木村長門守重成河内若江口にて討死す必死と極め首実検の晴にせんと伽羅を胡麻の油にて煎じ髪にすきこむ家康公其必死と極めたる感じ（井伊掃部頭内安東長三郎木村を討）たまひて御褒美の御詞ある此事諸書に少しの違ひあり是伽羅油の始なるへし

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五八頁）

『我衣』の作者である曳尾庵が幼年の頃より古老に聞いた話に、伽羅油の起源がしるされている。

それによると、井伊掃部頭内安東長三郎が、木村長門守重成を討ち取り、武士が戦場で討ちとった敵方の首級の身元を大将が判定し、その武士の論功行賞の重要な判定材料とするためにおこなわれた首実検のおり、木村長門守重成の髪に伽羅を胡麻油に煎じたものを塗ったことがはじまりだという。

この伽羅油の製法が、『新智恵乃海』にしるされている。それらよると、伽羅油は唐蝋や蝋燭などの蝋をもとに、天草、丁子、白檀、茴香、肉桂、松脂など様々なものを混ぜ、胡麻油で煉ってつくられた。

材料になる蝋は、家々を回り、蝋燭の残りかすを集めたものが使われていた。

甚九郎京にて聞はつり置きたる。蝋を晒す事をふと思ひ出し。宿の灯挑にとりつきしらうそくのながれを取て。こゝろみに合物をして曝して見るに。白く唐蝋のごとくなれりさあ銀もうけはきはまりぬと。それより江戸中を廻り。ろうそくのながれを買出し。是を晒して伽羅の油に思ひつき。堺町ぢかくに店をかり。白梅花白練といふ伽羅の油を仕出してより。御屋敷方をはじめ。町中から買に集り。わづか二年たゝぬ間に千両といふ金をため。諸方へ出見せを出し。手びろくするにしたがひ日々にはんじやうして。伽羅甚と名をとり

（「渡世商軍談」『八文字屋本全集』汲古書院、一九九三年、三八一―三八二頁）

江島其磧が、正徳四（一七一四）年にしるしたとされる『渡世商軍談』に、甚九郎という者が溶けた蝋燭の残りかすを集め、それをもとに伽羅油を作り販売した話が登場する。

寛文年中日本橋室町一丁目へ若衆方中村数馬伽羅油の見世を出す少し前に糀町へ谷嶋主水といへる女方油見世を出す是油みせの元祖なるべし

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五八―一五九頁）

寛文期（一六六一年～一六七三年）に日本橋室町一丁目に若衆方の中村数馬が伽羅油の店をだしたことが、『我衣』にしるされている。また、麹町に谷島の主水という女形がわずかに早く、店をひらいたともある。

上油一両に付代二十二文極上白匂油一両代三十六文極上々黒匂油一両代四十文

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五九頁）

中村数馬の店では、伽羅油は一両につき二二文から四〇文の値段で販売されていた。寛文期（一六六一年～一六七三年）における下女の給金は、一日一〇文程度であったといわれている。そう考えると、けっして伽羅油は安いものではなかった。

武士は油を付れども町人百姓は油元結を不用依之遠方にても曽て事欠ず用の序に油を求めに来る正徳迄は蛤貝に一両入二両入三両入油物五両入

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五九頁）

伽羅油は、蛤の貝に一両入り、二両入りと売られていた。もっぱら初期の頃は、購入する者は武士が中心だった。だが、正徳期（一七一一年～一七一六年）頃になると、その使用が町人や農民にまで広がっていく。

一般的には、胡麻油、胡桃油、椿油が用いられていた。夫婦の仲をよりよく保つために女性が心得ておくべきことを集めた『女

鏡』には、髪の油は胡麻油がよいが、男性によっては嫌う者がいるため、そういう場合は胡桃油を用いなさいとある。

ヨーロッパの女性は芳香ある香料をつかって髪に香りを与える。日本の女性はいつも髪に塗りつける油で悪臭を放つ

（『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、一九九一年、四〇頁）

よほどの悪臭であったのか、宣教師ルイス=フロイスも、好ましい感想を残してはいない。

聴衆の中に一人の女がいた。髪に猪の油を塗り、法を聞いていた。大徳はこれを見て、「大変くさい。頭に血を塗っている女を遠くに追い出せ」と叱っていった

（『日本霊異記』平凡社、一九六七年、一三三頁）

平安時代初期に書かれ、伝承された最古の説話集『日本霊異記』には、孝謙天皇の治世（七四九年～七五八年）に奈良の元興寺でおこなわれた法要中、行基が「大変くさい。頭に血を塗っている女を遠くに追い出せ」と叱ったエピソードがしるされている。理由は、参列していた女が、猪の油を髪に塗っていたからだ。

ルイス=フロイスが「悪臭を放つ」と感じたのは、胡麻油ではなく猪などの動物性の油を使用していた庶民の女性に接していたからかも知れない。

後ろは花色紬の首巻きして、衣裏のよごれぬ用心し、油堅めのかうがい曲の髪に、埃のかゝらぬ工夫して

（「世間娘容気」『浮世草子集』日本名著全集刊行会、一九二七年、七六五頁）

髷を結うとき、衣服はもちろん着物を着ている。現代に生きる男性は、女性の着物の襟を抜いたところからみえるうなじに、色気を感じる場合もある。

このうなじをみせるという姿は、髷が結われはじめてからのことだ。垂髪であれば、当然ながらうなじがみえることはない。

『世間娘容気』は、町人の娘を素材として、様々な娘像を誇張して面白おかしく描き、そのなかに当時の女性観、女性の社会的地位やモラルを浮かび上がらせる。そのなかで、長く大きく垂れ下がった髪の油で着物の襟が汚れることを心配する姿が描かれている。

髢とは、髷の後方へ張り出した部分を指す。髢の油は襟につきやすく、ついてしまうと洗うのに苦労しなくてはいけない。

『世間娘容気』では、花色紬の首巻きをしたとあるが、油がつかないように、着物の襟を抜くようになった。そして、新たにうなじへの美意識が生まれる。

装飾品には、櫛、簪などがある。櫛は、髪を梳くための道具

だ。それが、徳川時代中期以降、飾りとして用いられるようになる。

素材も、象牙や鼈甲などのような高価なものもあり、蒔絵が施されたりもした。

御角髪に刺せる湯津津間櫛の男柱一箇取り

（『古事記』岩波書店、一九六三年、二六頁）

櫛は『古事記』にすでにみることができ、その制作は延喜式にもしるされている。もともとは、髪を梳くために用いられていたが、次第に装飾となってくる。

中御門のとじきみ引きすぐる程、かしら一所にゆるぎあひて、さしぐしもおち

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、二〇―二一頁）

わかき人々菖蒲のさしぐし、物忌つけなどして

（『枕草子』岩波書店、一九六二年、六八頁）

『枕草子』に登場する「さしぐし」は装飾のための櫛を意味しており、髪を梳くための櫛は「ときぐし」として区別されていた。

いと寒げなる女房、白き衣の、いひ知らず煤けたるに、きたなげなる褶、ひき結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。さすがに、櫛おし垂れて挿したる額つき

（『源氏物語：一』岩波書店、一九六五年、二四一頁）

弁のめのとの御ともにさぶらふが、さしぐしを左にさゝれたりければ、「あゆよ、などくしはあしくさしたるぞ」とこそおほせられけれ

（『大鏡』岩波書店、一九六四年、三二頁）

平安時代は垂髪が主流だった。そのため、櫛をさす必要性はないのだが、『源氏物語』のきたなげなる老女の様子、『大鏡』の一品宮禎子内親王参内の祈りの描写から、髪上げをしたときに限り、櫛を使用していたことがわかる。

高価で貴重な櫛は武家階級が用いるもので、一般には使用されなかった。『我衣』によると、明暦期（一六五五年～一六五八年）では、鼈甲櫛は大名家で用いられ、遊女といえども黄楊櫛を用いていた。

黄楊の櫛は、古くは万葉の時代から使われている。

朝づく日向ふ黄楊櫛舊りぬれど何しか君が見るに飽かざらむ

（『万葉集：下』岩波書店、一九五五年、一七頁）

髪飾りを売る小間物屋（国際日本文化研究センター　外像データベース）

私の日向産の黄楊櫛も使い馴れて美しいつやが出てきたように、夫婦の仲もその櫛同様随分長くなったという歌だが、使い馴れるということは日常的に黄楊櫛が用いられていたことを意味する。

黄楊櫛は広く使用されるものであり、鼈甲櫛は高価なものだった。

透き通りの瑇瑁のさし櫛を銀二枚であつらへ、銀の笄に金紋を居ゑさせ、さんごじゆの前髪押へ、針がね入りの刎鬢を掛けて

（「西鶴織留」『近代日本文学大系』国民図書、一九二七年、七九〇頁）

北条団水が元禄七（一六九四）年にまとめた、井原西鶴の遺稿集である『西鶴織留』には、町人の経済的成功談などが集められている。

それによると、装飾用に作られた贅沢な櫛が用いられていることが読み取れる。そして透き通った瑇瑁製の櫛は銀二枚、すなわち八六文だった。

天和貞享期（一六八一年～一六八七年）になると、高価な鼈甲櫛が庶民のあいだで流行する。すると、一枚の櫛をさすだけでは飽きたらず、享保期（一七一六年～一七三六年）になると遊女のあいだでは、櫛を二枚、三枚と刺すことが流行した。しかし枚数の多さだけでは、飽き足らない。

上古つげの櫛上品也甚小ぶり也

（「我衣」『燕石十種』国書刊行会、一九〇七年、一五八頁）

身持は手のものにて日毎に洗ひ、押下げて大島田幅畳の元結を菱結にして、其の端をきり〳〵と曲げて、五分櫛の眞那板程なるをさし

（「好色一代女」『近代日本文学大系』国民図書、一九二七年、三〇一頁）

もともとの櫛は、黄楊の櫛の小ぶりなものが主流だった。それが『好色一代女』では遊女の挿す櫛が、まな板の様だと描写され

ている。

ちりめんの腰帯につまさきたゝかせたいまいの大ィさし櫛かうがいは一尺八九寸もあらんなる程てりのよきをさし

（「色道三略巻」『洒落本大成』中央公論社、一九七九年、四四頁）

『色道三略巻』には、笄の長さが一尺八九寸としるされている。約五八cmの長さの笄を頭に挿していたことになる。ある程度は誇張だとしても、かなりの大きさの櫛が用いられるようになる。

今世は金五、六両を普通の物とし、上品に至りては金二、三十両なるべし

（『近世風俗志：二』岩波書店、一九九七年、一一七―一一八頁）

次第に櫛の値段も高価となる。享保期（一七一六年～一七三六年）は、櫛の価格は金五、七両だった。しかし、それは普通のもので、良い櫛は二、三〇両にもなったという。

簪は、その誕生は古代にまでさかのぼることができる。薬師寺の吉祥天女には、髻華や挿頭花とよばれる、花びらのような簪がある。だが、もともとは装飾よりも実用に簪は用いられている。

和名類聚抄には、「簪 四声字苑云簪作含反 又則岑反 加无左之挿冠釘也 蒼頡篇云簪笄也」とあり、冠の付属品の一つで巾子のもとにさす細長い管が、簪だった。

簪は、髪挿が変化した語だが、その文字の通り髪にさし、冠の頂上後部に高く突き出て、巻き立てた髻を納める壺形の容器である巾子を落とさないように使用された。

それが次第と、女性の頭髪にさす装飾品となっていった。

白金の櫛の箱六具、黄金の箱、壺ども、中によろづのありがたき物ども入れて、世の中にありがたき御仮髻、蔽髪、へり櫛、釵子、元結、御宮仕への初めの御調度奉りたまふ

（「うつほ物語：二」『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇一年、五三頁）

『うつほ物語』にも、銀製の櫛の箱を六具、黄金の箱、壺など

飾られた遊女の髪形（国際日本文化研究センター　外像データベース）

のなかに、世にも珍しい「仮髻」とよばれる礼装の際に女性が頭にかぶせる桂のような装身具、「蔽髪」とよばれる意匠を凝らした女性の髪飾り、「へり櫛」とよばれる櫛、「釵子」とよばれる髪上げや髪留めに使う飾り金具、「元結」とよばれる髪の髻を結び束ねる紐などの道具がしるされている。このことから、古くから髪飾りはいくつかの種類があったことがわかる。

髪形が垂髪から結髪になることにあわせて、簪のように凝った意匠があらわれる。未婚の女性向けとして、鎖が何本も下がっていて、その先に蝶や鳥などの飾り物がついている派手な、歩揺簪なども生まれた。

山東京伝は『通言総籬』のなかで、遊女の髪が「小間物屋の店のようだ」としるしていた。

髷は技巧的になり、華美な飾りで装飾された。経済的に貧しい者ですら、髪を自分で結うことなく、女髪結をよぶ。

庶民の髪が遊女や歌舞伎役者のように結われ、髪や衣服が華美になり風紀を乱すようになった。当時は、寛政の改革のまっただなかだ。

前々より女結髪と申、女之髪を結渡世ニいたし候ものハ無之、代銭を出し結せ候女も無之所、近頃専ら女髪結所々ニ有之、遊女并歌舞伎役者女形風ニ結立、右に准シ、衣服等迄花美ニ取飾り、風俗を猥し、如何ニ候、右為結候女之父母夫等何と相心得罷在候哉、女とも万事自身相應之身嗜を可致儀、貴賤共可心掛事ニ候、以来軽キ者之妻娘共自身髪結ひ、女髪結ニ結せ不申候様追々可心掛候、是迄女髪結渡世いたし候もの家業を替、仕立もの洗濯其外女之手業ニ渡世を替候様、是又追々可心掛候

（『御触書天保集成：下』岩波書店、一九四一年、四三七頁）

風紀取締りによる幕府財政の安定化を目指すため、寛政七（一七九五）年一〇月に、幕府は女髪結を禁じる触をだした。それは、髪結を生業としている者は、仕立物屋や洗濯屋をはじめとする別の職業に替えよという内容だった。

延享元子年九月

町人男女衣類之儀、先年より度々相触候処、近年は別て結構成品を着し候由相聞え、不届候、前々相触候通、絹紬木綿麻布之外、一切不可着用候、若相背、過分成衣類着いたし候もの有之は、見合次第召捕、急度可申付候、且又婚礼之節不相応ニ美麗成道具相用候由、金銀金具蒔絵等道具堅令停止候、相背者於有之ハ、急度可申付候

（『御触書宝暦集成』岩波書店、一九三五年、二五八頁）

女髪結を禁じるに先立ち、延享元（一七四四）年に、幕府は衣服調度の贅沢を禁じる触をだしている。それによって、金銀や蒔絵を使った贅沢な櫛を造ることができなくなった。

しかしながら、それも守られることはなく、幕府の触に反して贅沢な金細工の櫛が出回り続けることとなる。

幕府は、その後も何度か触をだして女結髪をやめさせようとしたが、できなかった。やはり、美しい髷を手に入れた女性は、それを手放すことができなかった。

同十五日、本所にて夜鷹四十余人召捕られ入牢、是の時市中の女髪結も召捕へられし

（『武江年表：二』平凡社、一九六八年、一三三頁）

とうとう幕府は、嘉永六（一八五三）年三月一五日に、私娼の取り締まりと同時に、女髪結も取り締まるにいたる。

盛り髪も日本髪も、心は同じ

遊女や歌舞伎役者から庶民へと、女髪結のつくる髪形が広がった。そして、自分がより美しく目立つために、髪はより華美になっていく。

現代の「盛り髪」も徳川時代の「日本髪」も、じつは大きく変わらない。他人よりも、自分の方がかわいくなりたいという心が、髪形を派手にしたのだ。

かたちとしても、髪を束ねたり結ったりして頭頂に髻をかたどる日本髪と、結ったり巻き上げたりする盛り髪は、大きく違いはない。

髪が長いと労働の邪魔になるからと結髪する。これは、個人的な嗜好かもしれない。だが、長い黒髪が美人とされ、垂髪が大勢だった社会のなかで、次第に結髪が受け入れられていく。

これは、公家から武家へと支配階層の転換にともなう社会の変化と関係している。そして、盛り髪も社会とは無関係ではない。

これまで盛り髪は、その形態の類似性から、ヨーロッパの髪形と比較されることが多い。

大きく結った髪型は、身分の高さを示すとともに美しさの誇示、自己表現の手段でもありました。女性たちは高さを競い、同時に装飾もエスカレート。結った髪の上に髪飾りや模型をのせ、神話の世界や鉢植え、牧場、戦場などを表現しました。特徴は、髪型に世相が表現されたこと。戦争を勝利に導いた戦艦の模型をのせたりと、当時の事件、人気の動物、劇、歌などをモチーフに髪型を作っていった

（http://r25.yahoo.co.jp/fushigi/rxr_detail/?id=20090528-90007085-r25　二〇一一年二月一日）

一八世紀後半、マリー・アントワネット時代の女性の髪は、前髪を高くし、飾りをつけて巨大化した。大きく結い上げた髪の上は、いろいろと奇抜なものが飾られた。

髪を大きく結うことができることと経済的地位の高さは関連している。そして、他者よりも自分の方が注目されたいと、競争が

紋入り着物の女性（国際日本文化研究センター　古写真データベース）

働く。

その部分については、中世ヨーロッパの髪形と盛り髪は共通している。しかし、身分の高さを、今の盛り髪に読み取ることはできない。

髪を盛ることは、髪をきらびやかにし、地味な服を映えさせる。だが、それだけではなく、顔を小さく、華奢にみせる効果もある。顔が小さいと、「かわいく」みえるからだ。

かわいいと感じるのには、理由がある。身長に対して顔が小さく、頭が大きいこと、顔の中央よりやや下に眼があること。これは、子どもの顔の特徴である。

動物学者ローレンツは、ベビースキーマー（Kindchen-Schema）という概念を用いて、幼児的特徴がみる者に養護反応を促し、保護的感情を生起させる生得的解発性をあきらかにしている。

人は、本能的に子どもをみると、かわいいと感じる。それは人間の子どもだけではなく、哺乳動物に対しても同じだ。そして、かわいいと感じるものは愛おしく、守ってあげたくなる。

人を含めた哺乳動物の子どもが、かわいいと感じる特徴をもっているのは、いわば生き残るための戦略である。

子どもは大人に比べて弱い。自然界に生まれ落ちた哺乳動物であれば、大人のように狩りをすることも、また捕食者から逃げることも十分にはできない。

そこで、かわいさによって保護的感情を大人から引き出し、周囲の個体からの攻撃を抑制したり、食料の分配などの養護行動を引き出したりしている。

これはけっして、年齢的に子どもであること、もしくは体格的に子どもであることを必要としない。ローレンツのベビースキーマーにあるように、かわいさは主に顔の特徴に表れる。

大人であっても、子どもの顔の特徴が多く含まれていれば、養護行動や保護的感情を導くことができる。

盛り髪によって、自分をかわいくみせることは、先行きのわからない不安定な社会を生き抜く、無意識の戦略なのだ。

平安時代の垂髪、徳川時代の結髪、そして現代の盛り髪。これらは、日本の歴史のなかで突然あらわれたものではない。

髪形は、美しくなりたいという個人の志向と、時代の雰囲気に

応じて秩序ある発展をしてきた。髪形をみることで、社会の発展を見通すことができるのだ。